

# ヨハネによる福音書

めぐぴよんの  
はじめて聖書



著者：めぐぴよん

手元に聖書がなくても  
読める入門本！

## めぐぴょんのはじめて聖書 ヨハネによる福音書

---

はじめに。

この本は、一信徒であるウサギのめぐぴょんが、聖書に親しみを持ってほしいと書いた物です。聖書が手元になくても、聖書の話が読めます。

この本の目的は、読んだ人がクリスチャンになってほしいという物ではありません。ただ、何かのときに、聖書の話を出して慰められるとか、元気を取り戻すとか、そんな風に使っていただければうれしいです。そんな聖書と言う本が、教会以外であまりにも知らされていないのが、不満で書いたのです。

もちろん、聖書についてもっと知りたい方は、教会へ連絡してみてくださいって良いと思います。いろんな教会があって、ローマ法王を頂点としているのがカトリック教会、宗教革命の後に出来たのがプロテスタント教会です。そのほかのも、いろいろあるのですが、後は、行って見て居心地が言いかどうかって所でしょうか。

なるべく、「読みたくなくなった」と言われないように、難しい所は省いているものもあります。聖書が手元にある人は、お分りになると思います。正直、ヨハネによる福音書は、本当に難しい本なのです。掘り下げて行くときりが無いというか。でも、表面のほうだけいただいていくっていうのも、良いじゃないですか。誰が読んでも良い本なのですから。

さて、この「ヨハネによる福音書」は、紀元80年から90年頃に書かれたものです。聖書には、四つの福音書がありますが、マタイ・マルコ・ルカの三つは、同じ資料を使っていることから「共観福音書」と言います。ヨハネは、これらの三つの福音書を利用したかは不明ですが、これらとは違う資料のもとに書かれているため、「第四福音書」と呼ばれることがあります。非常に神秘的で、深い思考をもった福音書になっています。

そうそう、「福音書」という言葉は、「福音」（良い知らせ）を知らせる書という意味です。良い知らせが来ますように。

\*はじめて聖書を読む人を対象にしているため、理解が難しい所は、割愛している場合があります。ご理解ください。

### この本でのお約束

聖書は、●章●節と言う風に読みます。「節」と言うのは、文章の右上に出ている小さい数字です。これを簡略化して現すために、この本では「●：1－2」と表示します。この場合、●章の1節から2節と言うことです。

文章の最後に上のような表示の数字があるものは、聖書本文からの引用になります。聖書本文と解説文が混ざっている所もあります。その場合は数字が入っていない場合もあります。

「\*」マークが着いた文章は、本文に関係ある言葉などを解説しています。

# 言が肉となった

---

## 1章

【言が肉となった】（1：1－5）

ヨハネによる福音書は、こう始まっています。

初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神とともにあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言のうちに命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」（1：1－5）

もう少し分りやすくしてみましょう。

天地創造の時、初めに言（ことば）がありました。言は神の子イエスでした。イエスは神とともにいらっしやいました。イエスは神だからです。この神であるイエスは、この世の始まりに神と一緒にいました。すべての物はイエスによって存在するようになりました。この世に造られたもので、イエスによらず存在した物は何一つありませんでした。イエスのうちに命がありました。命は人間を照らす光でした。光はまだ混沌としているこの世の、闇の中で輝いていました。暗闇は光（イエス）に勝つことはできませんでした。

天地創造の以前から、神もイエスも存在されていたのです。

神から遣わされた一人の人がいました。その名はヨハネです。彼は、証言をするために遣わされました。人間を照らす光について証言をして、また、すべての人がヨハネの証言を信じるようになるためです。彼は光（イエス）ではありません。イエスについて証しをするために来たのです。

その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのです。イエスは、人間の世に遣わされましたが、世の人たちはイエスの語ることを認めませんでした。

イエスは、人間として天から降りられるとき、イスラエルの民になりました。そこで、イスラエルの民のところに行かれましたが、その民もイエスを受け入れようとしませんでした。

しかし、イエスは、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には、神の子となる資格を与えました。この人々は、血縁によってでなく、肉の欲によってでなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのです。

さっき、すべてのものはイエスによって存在したと書きましたが、イエスだけは違っていました。人間の成すことによってではなく、神によって生まれたのです。

イエスは、天から降って人間の姿となり、私たちの中で生活をされました。私たちはその栄光を見たのです。それは、父の独り子としての栄光であり、恵みと真理とに満ちていました。そしてこれから、その出来事を伝えていきます。

ヨハネは、この方（イエス）について証言をし、声を張り上げて言った。「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである」わたしたちが皆、この世の満ちあふれる豊かさの中から恵みのうえにさらに恵みを受けた。律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通してあらわれたからである。いまだかつて、神を見た者はいない。父の懐にいる独り子である神、この方が神を示されたのである。（1：15－18）

【洗礼者ヨハネの証し】（1：19－28）

ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であった。  
（1：28）

イエスの先触れとなった「洗礼者ヨハネ」が証言します。  
エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人を派遣して、こんな問答がありました。

「あなたは、どなたですか」

彼は隠す必要がないので「わたしはメシア（救世主）ではない」と言いました。この前に語ったように、「彼はイエスではなく、イエスについて証言をするために来たからです。すると彼らは「では何ですか。あなたはエリヤですか」と訪ねました。エリヤというのは旧約聖書の中の偉大な預言者の名前です。

ヨハネは、「違う」と言いました。

さらに、その人たちは「あなたは、あの預言者なのですか訪ねました。「あの預言者」とはモーセのことです。

ヨハネは「そうではない」と答えました。

そこで、彼らは言った。「それではいったい誰なのですか。私たちを遣わした人々に返事をしな

ければなりません。あなたは自分をなんだと言うのですか」

ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。

「わたしは荒野で叫ぶ声である。

『主の道をまっすぐにせよ』と。」（1：23）

遣わされた人たちは、ファリサイ派という派閥に属していました。ファリサイ派は、律法にかいてあるたくさんの戒律を守ることで永遠の命に預かれると思っていました。

彼らは、ヨハネに尋ねて「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ洗礼を授けるのですか」（1：24）

ヨハネは答えた「わたしは水で洗礼を授ける。でも、あなたがたの中には、あなた方の知らない方がおられる。その人とはわたしの後から来られる方で、わたしは、その履き物のひもを解く資格もない。」

（1：27）

これは、ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事でした。

【神の子羊】（1：29－34）

その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、このかたのことである。わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。そしてヨハネは証しした。

わたしは”霊”が鳩のように天から降ってこのかたの上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を受けるためにわたしをお遣わしになった方が、『”霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が聖霊によって洗礼をさずける人である。』とわたしに言われた。わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。

（1：29－34）

洗礼者ヨハネはイエスが神と共に創造のときから存在しておられること、そして、受肉（人間の肉体になること）され、自分の後から来られることを現しています。

【最初の弟子たち】（1：35－51）

その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。そして、歩いておられるイエスを見つ

めて、「見よ、神の子羊だ」と言った。

(1 : 35 - 36)

二人の弟子はそれを聞いて、ヨハネの弟子をやめてイエスの弟子になることにした。イエスは従って来る二人を振り返り、「なにを求めているのですか」と言われました。

その答えの代わりに、

「ラビ(先生)、どこに泊まっておられるのですか」と言うと、イエスは「来なさい。そうすれば分かる」と言われました。(1 : 37)

彼らについて行って、イエスの泊まっておられるところにつきました。そして、イエスのもとに泊まって教えを乞いました。

二人のうちの一入アンデレは、兄弟のシモンに会いに行き「私たちはメシアー油注がれた者一に出会った」と興奮して語りました。そして、シモンもイエスのところに連れていったのです。

\*油注がれた者というのは、神の霊を象徴する油(香油)を注ぐもので、神の霊を象徴するので、天から任命された者だという意味を持ちます。祭司の任職のときなどに行われました。また、王の即位に行われた時代もありました。

【フィリポとナタナエル、弟子となる】(1 : 43 - 51)

その翌日、イエスは、ガリラヤへ行こうとしたときに、フィリポに出会って「わたしに従いなさい」と言われました。フィリポは、アンデレとペトロの町、ベトサイダ出身であった。(1 : 43)

フィリポはすぐに、イエスに従っていきました。支度もなく、いきなり従うことができるのは、神様が選び出して下さったからだと言えるでしょう。

フィリポはナタナエルに出会って言った。「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人でヨセフの子イエスだ。」するとナタナエルが「ナザレからよい者はでないと言っているが」と言ったので、フィリポは、「来て、見なさい」と言った。(1 : 45 - 46)

当時のナザレは、偽物のメシアなどが出てとても評判が悪かったので、ナタナエルは、警戒したのです。

イエスは、ナタナエルが御自分の方へ来るのを見て、彼のことをこう言われた。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い。」ナタナエルが「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言うとイエスは答えて「私は、あなたがフィリポから話しかけられる前に

イチジクの木の下にいるのを見た」と言われた。

(1 : 47 - 48)

\*イスラエルのイチジクは、大木に成長し、その木陰でラビたちが教えることもよくありました。ナタナエルもこのとき、イチジクの下で律法を勉強をしていたのでしょう。

ナタナエルは答えた。「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」と言うと、イエスは答えて言われた「イチジクの木の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか。もっと偉大なことをあなたは見ることになる。」さらに「はっきり言うておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなた方は見ることになる。」

(1 : 49 - 51)

「もっと偉大なこと」とは何なのでしょう。天使達が上り下りをするのは、いつのことなのでしょう。

\*ここで1章全部を使った長い序文は終わりです。今後は、しるしによる活動を記した部分に入っていきます。

\*これから記されているイエスの「しるし(奇蹟)」は、六つから七つあります。(数え方によって違う意見がある) 共観福音書においては、「ガリラヤの春」と呼ばれた一つの時期があり、その後はエルサレムに上って死ぬのであるが、ヨハネ伝を丁寧に読むとイエスがガリラヤとエルサレム、ユダヤ間を、少なくとも三度往復していることがわかります。時にそれぞれの事件は必ずと言ってよいほど、ユダヤ教の暦と関係して記録されています。それはヨハネ伝の一つの特徴であり、重大関心事です。ユダヤ教の暦はイスラエルの歴史の中にあつた重要な出来事が様々な祭りとなって編まれているのですが、その内容と関係してイエスのしるしが起こるのです。言い換えればかつて古い契約との関係で起こった神の啓示の事件が、イエスにおいても一度新たにされるのです。



## カナでの婚礼

---

### 2章

#### 【カナでの婚礼】（2：1－12）

聖書において婚礼はしばしば、神とイスラエルとの関係を夫婦の関係になぞらえることと関連して用いられ、神の国の到来が婚礼の食卓として祝われるというイメージでとらえられていました。それを背景として、この事件が記されています。

三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。イエスも、その弟子達も婚礼に招かれた。（2：12）

「母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。」（2：3）

イエスの母は、この席での接待役を努めていたのでしょう、ぶどう酒が底を付いたことを知り、困ってイエスにそのことを話しています。祝いの席でお酒がつかえることは大失態です。ユダヤ教徒にとって、神の国の食卓の喜びが完結されないことを指していると言えます。イエスの母は、イエスの力を知っていたのかはわかりませんが、大変なことになったとおろおろしながら、イエスに一大事を告げたのでしょう。

「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです」

（2：4）

なんて冷淡な応え方をするのだろうと、まず、思ってしまう。しかし、ヨハネ伝の特徴はイエスの主導性にあります。すなわち、イエスが他の人のことばによって受動的に何かするのではなく、イエスが自由な意志によって振る舞うことなのです。それで、このような言い方をしたのだと思われます。今ひとつ、解釈を上げるなら、ギリシャ語原文から直訳すると、「私の関心とあなたの関心は別なのですよ」という意味に取れるそうです。決して母を突き放す冷たい調子ではなく、言外に「心配はご無用です。わたしに任せておいてください」という意味が読み取れるとも言われています。

「わたしの時はまだ来ていません」（2：4）

「わたしの時」はすなわち「イエスの時（受難・十字架・復活）」です。イエスの時は、聖霊によらなければ知り得ず、イエスの時が来るまでは、イエスの言葉と業、すなわち「しるし」は、はっきりと人々にはわからないということです。このとき、イエスは「時はまだ来ていません」と語っていいますが、結局は、水をぶどう酒に変えており、この奇跡には深い意味があったからと考えられます。

「しかし、母は召使いたちに『この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください』」と  
言っておいたのです。イエスに拒否されると取れる言葉を受けつつも、母は感じる所があり、この  
ような行動に出たのだらうと思います。

「ユダヤ人の清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった」  
(2 : 6)

「ユダヤ人の清めに用いる」というのは、律法の定めに従って食卓につく前後の清めに使う水の  
ことです。(当時は水道もありませんから)六つ置いてあったとは、七が完全数で象徴といわれ  
ますが、それに一つ足りません。そこにもう一つ水がめを持ってくるのではなく、イエスが用い  
られるという全く新しい要因で、祝宴の喜び、神の国の食卓が満たされて完結するようになると  
考えることができます。

「水がめに水をいっぱい入れなさい」(2 : 7)

イエスの母から、イエスの指示に従うように言われていた召使いたちは、言われたとおり、水を  
入れ、それを宴会の世話役の所へ運びました。

世話役はぶどうに変わった水を味見した。このぶどう酒がどこから来たか、水をくんだ召使い達  
は知っていたが、世話役は知らなかったので、花婿を呼んで言った。「だれでもはじめに良いぶ  
どう酒を出し、酔いがまわった所に劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を取  
って置かれました」

(2 : 9 - 10)

\*イエスは、結果として母の期待にこたえて、水をぶどう酒に変えられました。しかし、イエス  
がそうされたのは、あくまでご自身の目的に従って、ご自分の「時」のためにであったのです。  
ちなみに水はユダヤ教、ぶどう酒はキリスト教を象徴するとされるとされます。

【神殿から商人を追い出す】

(2 : 23 - 22)

ユダヤ人の過越祭が近づいたので、イエスはエルサレムへ上って行かれた。そして、神殿の境  
内で牛や羊や鳩を売っているものたちと、座って両替をしているものたちをご覧に成った。イエ  
スは縄で鞭を造り、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒し  
、鳩を売るものたちに言われた。「このようなものはここから運び出せ。わたしの父の家を商売  
の家としてはならない。」

弟子たちは「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」と（旧約聖書に）書いてあるのを思い出した。ユダヤ人たちはイエスに、「あなたはこんなことをするからには、どんなしるしを私たちに見せるつもりか」と言った。イエスは答えて言われた。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」それでユダヤ人たちは、「この神殿は立てるのに四十六年もかかったのに、あなたは三日で建て直すのか」と言った。イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのであるイエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちはイエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉を信じた。（2：13－22）

\*神殿の境内で動物が売られていたのは、犠牲として捧げるためでした。捧げるためには数々の規定があり、規定外だと捧げることができないのです。そこで、既に規定を満たしている動物を買って捧げることで、商売が成り立っていたのです。

\*神殿税は決まった貨幣で払わなければ行けなかったもので、境内で両替商が幅を利かせていたのです。

神殿から商人たちを追い出すこの事件は、他の福音書にも記載されていますが、一般に「宮きよめ」と呼ばれています。福音書によって、行われた時は違っています。

ヨハネにある「宮きよめ」は、イエスが単にユダヤ教、特にそのエルサレム神殿における神殿礼拝の浄化という意味で記録されているのではなく、神殿礼拝がイエスにおいておきかえられるという根源的なしるしとして、書かれているということです。

「この神殿を壊してみよ。三日で立て直してみせる」

（2：19）

神殿には至聖所という神の臨在の場所があります。神殿はイエスの体であり、十字架にかかっても三日目には甦ることが出来る（神殿を壊しても三日目に甦る）ことが暗示されています。

・エルサレム神殿は、紀元70年のエルサレム陥落のときに、ローマ軍により壊されることになる。成立時期から、ヨハネ伝の作者は、当然そのことを知っていたであろうと思われる。

【イエスは人間の心を知っておられる】

（2：23－25）

宮きよめの出来事に続いて過越の祭りに起こったことが記されています。イエスはしるしを見せましたが、しるしを見なければ信じないのが人間であることをよくご存じでした。それで、イエス自身は、しるしをみて信じて近づいてくる人たちを信じておられませんでした。イエスを愛す

る人々に囲まれながら、イエスは孤独だったのかもしれない。

### 3章

【イエスとニコデモ】（3：1－21）

さて、ファリサイ派に属するニコデモというユダヤ人の議員である人がいた。

ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、私どもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことなどできないからです。」

イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく、人は、新たに生まれなければ神の国を見ることはできない。

イエスは、人間の内的な生まれ変わりについて話していらっしゃいます。ニコデモはこれを聞いて言いました。「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょう。もう一度母の胎内に入って生まれることができるのでしょうか。」と肉体の生まれ変わりの話だと思って愚問を呈しました。

イエスはお答えになりました。「はっきり言っておく、だれでも水と霊との洗礼によって生まれなければ、神の国に入ることはできないのです。肉から生まれたものは肉であり、霊から生まれたものは霊である。『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いてもそれがどこから来て、どのへ行くかを知らない。神の霊から生まれた者もみなその通り自由なのです。」

そこでニコデモは「どうして、そんなことがありえましょうか」と言いました。まだ、イエスのおっしゃることが解らないのです。

イエスは答えて言われました。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが解らないのか。」はっきり言っておく、わたしたちは知っていること、見たこと証していることに、あなたがたは私の証しを受け入れない。私が地上のことを話しても、信じないとすれば、天上のことを話したところでどうして信じるだろう。天から降りて来た者、すなわち人の子（イエス）のほかには、天に上った者は誰もいない。そして、モーセが荒れ野で蛇を上げた（旧約聖書 民数記21：4－9）ように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得る為なのです。

\*モーセの一行が神様に従い、奴隷扱いされているエジプトを脱出し、荒野をさまよう。つらい旅路に神を背に逆らう物たちが出た。その時、神は蛇を送り、多くの犠牲者が出た。このことを忘れないために、神は青銅蛇をつくらせ、その後は、これを旗竿の先に着けてかざすと、蛇で死

者が出なくなった。

(この後は、ニコデモに話したと言うより、弟子に話したのではないかと思われます。)

神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は、裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたと言うことが、明らかなるために。(3:16-21)

ここで注目したいのは、信じている者は裁かれることが無いが、信じていない者は、既に裁かれている。と言うところです。よく、悪いことをしたら、死んだ後に地獄に行くと言う言い方をしますが、ここでは、既に裁かれているのだ、つまり、神の国に行くことも永遠の命をいただくこともできないと、生きている今、決まっていることだということです。それでは、救いがないではないかと言いたくなりますが、だからこそ、生まれ変わることが必要になって来るのです。

\*イエスは話をされるとき、重要な部分のさしかかると、「はっきり言っておく」と必ずおっしゃいます。覚えておくイエス様がおっしゃりたいことがわかって読みやすいと思います。

【イエスと洗礼者ヨハネ】(3:22-30)

その後、イエスは弟子たちとユダヤ地方に行って、そこで一緒に滞在し、洗礼を授けておられました。一方、洗礼者ヨハネはアイノンと言うところで洗礼を授けておられました。ヨハネは後に投獄されますが、まだ、その前の出来事でした。お二人のおられたところは、非常に近かったようです。

ヨハネのところへ来ていた人がヨハネに告げました。「ヨルダン川の向こう側で、あなたと一緒にいた人が洗礼を授けています。」

ヨハネは答えて言いました。「天から与えられなければ、人は何も受け取ることが出来ない」それはヨハネがあたえられたことは、イエスの前に人々の信仰の道を造って行くことである。「わたしはメシアではないと言い、あの方の前に遣わされた者だ。あの方は栄え、わたしは衰えなければならない」これは、洗礼者ヨハネの最後の証しだったのでしょう。

\*この後、洗礼者ヨハネは人気がありすぎて、ローマへの暴動の懸念から、また、ヘロデ王の結婚が近親相姦だと非難したことで、逮捕され、殺されてしまうのです。

【天から来られる方】（3：31－36）

\*この部分は、洗礼者ヨハネの証しの続きとみる場合もあるが、それよりも、この福音書を作ったヨハネの教会による加筆とも言われている。

上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出たものは地に属し、地に属する者として語る。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。このかたは、見たこと、聞いたことを証しされるが、誰もその証しを受け入れない。その証しを受け入れるものは、神が真実であることを確認したことになる。神が御遣わしになった方は、神の言葉を話される。神が”霊”を限りなくお与えになるからである。御父は御子を愛して、その手にすべてをゆだねられた。御子を信じる人は永遠の命を得ているが、御子に従わない者は、命に預かることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる。」（3：31－26）

天から来られた方が神からたくさんの”霊”を与えられて地上に来ているが、誰もその証しを受け入れないということが書かれています。御子を信じない者は、永遠の命をもらえないだけでなく、神の怒りがその上にとどまるというのです。これが、あるいはこの人が、本物であるのか、だまされているのか、日々の中でも、私たちは判断に迷います。そこへ、御子が来られたらすぐに受け入れられるでしょうか。日常の煩雑な仕事にまぎれて、私たちは、イエスが来られても見えないかもしれません。

\*「射禱（しゃとう）という言葉があります。特別な祈りの時間を持つだけでなく、日常の様々な事柄に出会い、すぐにその場で短く祈ることだそうです。常に神様のことを信じて、ずっと意識して（むしろ無意識かもしれませんが）「イエス様ならどうするだろう」と考えて生きるのがクリスチャンの理想の姿かもしれません。

## イエスとサマリアの女

---

【イエスとサマリアの女】（４：１－４２）

さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり洗礼を授けておられることがファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、一洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちであるユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。しかし、サマリアを通らねばならなかった。そこで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地が近くにある、シカルと言うサマリアの町に来られた。

（４：１－５）

洗礼者ヨハネよりもイエスが人気を集めていると、ファリサイ派が知ってしまいました。たくさんの方が洗礼を受け、信者が増えることで、イエスを信じる信徒が暴動を起こし、ユダヤ教中央部や統治を受けているローマに歯向かえば大変なことになります。イエスは、なるべくぶつかり合いを避けるために、ガリラヤへ帰られることになりました。これは、その途中の話です。

そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。

サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。（４：６－９）

サマリアの女と出会ったのは、お昼のことでした。普通、水汲みは朝の仕事です。大勢の人に会って悪口を言われたくない事情がこの女性にはあったのでしょうか。

\*ユダヤ人とサマリア人の不和には、長い歴史あります。それは旧約聖書時代から始まっています。サマリアを占領していたバビロニアの政策で、サマリア地方では異邦人の婚姻関係が進み、信仰的にも人種的にも純粋を求めるユダヤ人がサマリア人を見下すようになったのです。その他にも様々なぶつかり合いがあり、イエスの時代にはサマリア人と接触することは避けられていました。旅行なども遠回りでもサマリア人の土地を避けるようにしていました。ですから、イエスがこの女性に、声をかけたことは異例のことだったのです。

イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また「『水を飲ませてください』といったのが誰であるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えることであろう」女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでな



いし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。（４：１０－１１）

イエスは、本物の水についてでなく、霊的な水についての話を突然始められました。しかし、相手の女性はそれが分らず、一体どこからその「生きた水」を取ってくるのかと、物質的な水のことしか頭にありません。くむ物も持っていないし、井戸は深い。しかも、さっきは水を飲ませてくれと言った人を、どうして信じることができるのでしょうか。

あなたは私たちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子どもや家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」イエスは答えて言われた。「この水を飲む物は誰でもまた渴く、しかし、わたしが与える水を飲む物は決してかわかない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る。」女は言った。「主よ、渴くことがないように、また、ここにくみに来なくても良いように、その水をください」（４：１２－１５）

イエスは「渴くことがない水を与える。その与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る」と言います。もう大変な水汲みをしなくて言いなら、という一心で、サマリアの女性は、どのようになるのか、どこにあるのか分らないまま、ただイエスに「その水をください」とお願いしたのです。

イエスが「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、女は答えて「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた、「『夫はいません』とはまさにそのとおりだあなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ」（４：１６－１８）

イエスは唐突に、「夫を呼んで来なさい」と言われました。彼女は「わたしには夫はいません」と素直に答えました。イエスはすでに彼女がどのような身の上かご存知でした。嘘をつくかどうか、試しておられたのでしょうか。

女は言った。主よ、あなたは預言者だとお見受けします。わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。貴方がたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝するときが来る。あなたがたは、知らない物を礼拝しているが、わたしたちは知っている物を礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理を持って父を礼拝するときが来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理を持って礼拝しなければならない。（４：１９－２４）

今まで話をしてみて、女性は、イエスを預言者だと思いました。そこで、ずっと気になっていた礼拝について尋ねました。すると、イエスは礼拝は場所ではなく、霊と真理を持ってするものなのだと教えていただきました。

女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。その方が来られる時、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているわたしである。」（４：２４－２６）

彼女はどんなに驚き、喜んだでしょうか。

ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、なにか御用ですか」とか「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。女は水瓶をそこに置いたまま町に行き、人々に言った。「さあ、見に来てください。わたしが行なったことをすべて言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」人々は町を出て、イエスの元へやって来た。（４：２７－３０）

弟子たちが食べ物を調達して帰ってきました。そして、イエスが女性と（しかも、サマリアの）話しておられるのを見て、驚きました。しかし、話に入ろうとしなかったのは、サマリア人と会話したくなかったからでしょうか。それとも、二人があまりに熱心に話しておられたからでしょうか。

彼女は、町へ行って自分の体験を話し、それを聞いて人々がイエスの所へやってきました。

その間に、弟子たちが「ラビ、食事をどうぞ」と勧めると、イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われました。弟子たちは、「誰かが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。イエスは言われた。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わせになった方の御心を行ない、その業を遂げることである。（４：３１－３８）

食事を勧められたイエスは、わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある。とおっしゃいました。神の御心を行い、その業を遂げること」それこそが、食べ物であり、今、サマリアの女性を町まで走らせた喜びだったのです。

「あなた方は、『刈り入れまでまだ四ヶ月もある』と言っているではないか』わたしは言っておく。目を上げて畑を見るがよい、色づいて刈り入れを待っている。既に刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである。そこで、『一人が種を蒔き、別の人刈り入れる』ということわざのとおりになる。貴方がたが自分で労苦しなかったものを刈り入れるために、わたしはあなた方を遣わした。他人々が労苦し、あなた方はその労苦の実にあずかっている。」

(4 : 35 - 38)

突然、イエスは「刈り入れ」の話を始められました。

信仰の実がなるまで、まだ四ヶ月はかかるなどとわたしたちは言うことがあるが、目を上げて、畑をじっくり見ると、もう既に刈り入れを待っていることがあるとイエスは言われます。信仰が大きくなるのは、直接わたしたちが手を下したときだけではない。蒔く者と刈り入れる者が違って、共に喜ぶのです。信仰は、教えやしるしだけでなく、様々な所で栄養をもらっているものなのです。

さて、この町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行なったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。そこで、このサマリア人たちはイエスの元にやって来て、自分たちの所にとどまるようにと頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。彼らは女に言った。わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分ったからです。」

町へかけて行ったサマリアの女性の証言で、イエスたちは頼まれて、二日間、この町に滞在することになりました。そして、多くの人がイエスの話を聞いたのでした。最後の日には、初めは女性のしるしがあったから信じたが、今では自分でイエスの話を聞いて信じている人が大勢いました。

【役人の息子をいやす】 (4 : 43 - 54)

二日後、イエスはそこを出発して、ガリラヤへ行かれた。イエスは自ら「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」とはっきり言われたことがある。ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも祭りに行ったので、そのときエルサレムでイエスがなされたことをすべて、見ていたからである。(4 : 43 - 45)

イエス一行は、シカルで二日間過ごし、ガリラヤに旅立たれました。イエスは「預言者は故郷では敬われないものだ」と不安な思いを持っていらっしゃいましたが、ガリラヤにつくと、思いがけず人々のイエスに歓迎されたのです。彼らは、エルサレムの過越祭でのイエスを見ていたからです。

イエスは、再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、前にイエスが水をぶどう酒に変えられたところである。

(4 : 46)

イエス一行は、初めてイエスがしるしを行ったカナの町へ行かれた。このしるしは、この地方には広く知れわたっていたでしょう。

さて、カファルナウムに王の役人がいて、その息子が病気であった。この人はイエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞き、イエスのもとに行き、カファルナウムまで下って来て息子をいやして下さるように頼んだ。息子が死にかかっていたからである。イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われた。役人は、「主よ、子供が死なないうちにおいで下さい」と言った。（４：４６－４９）

役人は、イエスが言われるように、エルサレムでの奇蹟を思い浮かべ、瀕死の息子のためにイエスの所へやってきました。ところが、イエスはしるしを見なければ信じないと言われて、どうしたら良いか分からなくなってしまいました。

イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」その人はイエスの言われた言葉を信じて帰って行った。ところが、下って行く途中、僕たちが迎えに来て、その子が生きていることを告げた。

そこで、息子の病気が良くなった時刻を尋ねると、僕たちは、「昨日の午後一時に熱が下がりました」と言った。それは、イエスが「あなたの息子は生きる」と言われたのと同じ時刻であることを、この父親は知った。そして、彼もその家族もこぞって信じた。これは、イエスがユダヤからガリラヤに来てなされた、二回目のしるしである。

（４：５０－５４）

役人は「あなたの息子は生きる」その言葉だけをたよりに、自分を励ましながら家に向かったでしょう。途中で僕が見えたときも、もしやダメだったのではと思う気持ちに、もう一度あなたの息子は生きる」というイエスの言葉をかみしめたことでしょう。こうして、かつてカナの婚礼で、そしてその日役人の息子に、二つのしるしがもたらされたのです。役人の息子は命の授け手であるイエスに命を救われたのです。

このしるしによって、イエスの「言葉」にも、大きな力があることを私たちは知らされたのでした。

## ベトザタの池で病人をいやす

---

【ベトザタの池で病人をいやす】(5:1-18)

その後、ユダヤ人の祭りがあったので、イエスはエルサレムに上られた。エルサレムには羊の門の傍らに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があり、そこには五つの回廊があった。この回廊には、病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢よこたわっていた。(5:1-4)

なにの祭りかはよくわかりませんが、ユダヤ人の祭りということで、イエスはエルサレムに上って行かれました。エルサレムの羊の門という所に、「ベトザタ」という池があり、その回廊にはたくさんの病気や障がいを持った人たちが横たわっていました。ルルドの泉の間欠泉のようなもので、それを浴びるといろいろな効能があったということではないかと思えます。

さて、そこに三十八年も病気に苦しんでいるひとがいた。イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であることを知って、「良くなりたいか」と言われた。病人は答えた「主よ水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、他の人が先に降りて行くのです。」イエスは言われた。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩き出した。(5:5-9)

三十八年もどのような病気か分かりませんが、苦しんでいる人が出てきます。「わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです」といっていることから、歩くこともできないことが分かります。ただ「ベトサダ」の効用だけを信じてここにいるのでしょうか。ひょっとして、イエスと弟子たちが池に入れてくれるのではないかと期待を持ったかもしれません。その病人に、イエスは「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」とおっしゃったのです。その人は、言われたとおりにになりました。

その日は安息日であった。そこでユダヤ人たちは病気をいやしていただいた人に言った。「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは律法でゆるされていない。」しかし、その人は、「わたしをいやしてくださった方が『床を担いであるきなさい』と言われたのです」と答えた。彼らは、「お前に『床を担いで歩きなさい』と言ったのはだれだ」と尋ねた。しかし、病気をいやしていただいた人は、それがだれであるか知らなかった。イエスは、群衆がそこにいる間に立ち去られたからである。

(5:9-13)

その日はユダヤの人には大事な安息日でした。安息日は労働をしない日で、その内容は細かく規定されていました。床を担いであるく人に安息日にはそれは許されていないと言ったユダヤ人たちは、お前をいやし、床を担がせたのはだれかと言いますが、彼は混乱のなかで名前も聞か

ぬままになっていました。

その後、イエスは、神殿の境内でこの人に出会って言われた。「あなたは良くなったのだ、もう罪を犯してはいけない。さもないと、もっと悪いことがおこるかもしれない。」この人は立ち去って、自分をいやしたのはイエスだと、ユダヤ人に知らせた。そのために、ユダヤ人たちはイエスを迫害し始めた。イエスが安息日にこのようなことをしておられたからである。イエスはお答えになった。「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。」このために、ユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとねらうようになった。イエスが安息日を破るだけでなく、神をご自分の父と呼んで、ご自身を神と等しい者とされたからである。(5:9-18)

その後、この人は神殿の境内でイエスと出会い、その名前を聞きました。イエスが「もう罪を犯してはいけない」と言っているのは、当時は病気の原因は罪だと考えられていたからです。この人は、何が起こるか知らず、ユダヤ人にイエスの名前を知らせに行きます。ユダヤ人たちは、ちょうどよいきっかけだと、イエスを迫害しはじめました。そして、「なぜ安息日に禁じられたことをするのか」と聞くとイエスは「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」と答えられました。それは、イエスを神の子と信じないユダヤ人たちにとって、神への冒瀆の言葉でした。

#### 【御子の権威】(5:19-30)

そこで(安息日について語っているで)イエスは彼らに言われた。「はっきり言うておく。子は父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることは何でも、子もそのとおりにする。父は子を愛し、ご自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、父も、与えたいと思う者に命を与える。また、父はだれもが裁かず、裁きは一切子に任せておられる。すべての人が、父を敬うように、子を敬うようになるためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。

(5:19-23)

ここで、安息日を守らなかったことや、自分を神と等しくする発言をするイエスが、ユダヤ人たちに語りだします。父がしないことを自分の子がすることは、できない。父が示す業は、子も示すことができる。そして、父はだれも裁かず、一切の裁きは子に任せることなどを話されました。もちろん、父は神様であり、子はイエスです。

はっきり言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死者から命へと移っている。はっきり言うておく。死

んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。父はご自身のうちに命を持っておられるように、子にも自分のうちに命を持つようにして下さったからである。また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けさせるために出て来るのだ。

わたしは自分で何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志でなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。

(5 : 24 - 30)

イエスは、ご自身が神と対等であることをはっきりと宣言されます。さらに、一切の裁きをまかされていることも語っておられます。だからといって、自分勝手に人々を裁いているのではなく、父（神）の心と同じ心で裁いているから正しいのです。

神様とイエスの関係というのは、説明しがたいものがあります。イエスは神だと言う時、では、神が肉体をもっていやしをしたり教えたりしているのかということ、違います。父と子という時も、単純に親子と考えられません。母がいる訳でもないようですし。しかし、母なる神と祈ることはあります、神様は、父であり、母でもあるのだと思います。難しく考えると分からなくなってきます。人間の私たちには分ることの出来ない関係なのだろうと言えるのかもしれませんが。

\*ヨハネ伝の記者は、なぜイエスがキリストであることの証しの信憑性を論じる必要があったのでしょうか。

第一にイエスの死後70年以上のときが流れていたことです。イエスはもちろん地上にはいない、その目撃をした人たちもほとんどいない状況でした。そんな中で、「イエスはだれであるか」という本来、基本的な点に、様々な解釈が現れ、イエス・キリスト像の真実性を主張しなければいけない時代だったのです。

更に、もう間もなくであるといわれた終末の到来が遅延していることです。紀元70年にはエルサレムが陥落しますが、それでも終末は来なかったのです。イエス像の信憑性を確立して行かなくてはならないのが、この福音書を書いた時代だったのです。

## 五千人に食べ物を与える

---

### 【五千人に食べ物を与える】(6:1-15)

その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。大勢の群衆が後を追った。イエスが病人になさったしるしを見たからである。イエスは山に登り、弟子たちと一緒にお座りになった。ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。イエスは目を上げ、大勢の群衆がご自分の方へ来るのを見て、フィリポに「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えば良いだろうか」と言われたが、こう言ったのはフィリポを試みるためであってご自分では何をしようとしているか知っておられたのである。フィリポはめいめい少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょうと答えた。

(6 : 1 - 7)

イエス一行が移動するたびに、大勢の群衆がついてきます。イエスのしるしを見るごとに群衆は増えて来ていたでしょう。その大勢の人に、おなかがすいているだろうからパンを与えようとイエスが提案をされました。そして、弟子のフィリポに、「どこで買えばよいだろう」と言われます。フィリポは、少しずつ渡すとしても、こんなに大勢では、二百デナリオンあっても、足りないでしょう」と答えます。1デナリオンが当時の一日の労働賃金でしたから、二百デナリオンはかなり大きな金額になります。しかも、それでは満腹になるほどは買えません。もちろん、そんなお金もありません。

弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレがイエスに言った。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」イエスは、「人々を座らせなさい。と言われました。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ五千人であった。さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。人々が満腹した時、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパン屑で、十二の籠がいっぱいになった。そこで人々はイエスのなされたしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である」と言った。イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、一人でまた山に退かれた。(6 : 8 - 15)

少年が一人、自分の持っていたパンと魚を差し出しました。それは、家族との食事用に持っていたものかもしれません。これだけの人数の中で、少ないけれど役に立てばとアンデレに申し出たのではないでしょう。イエス様にと差し出したのかもしれません。大麦のパン五つと魚二匹(魚は酢漬けか薫製であったと思われます)は、イエスによって、五千人の人たちを満腹にしたの



です。いえ、この時代には、女性や子どもは蔑視されてカウントされませんでしたから、五千人よりももっとたくさんの方が食べたはずです。

最初に食物を差し出した少年がいたからこそ、五千人以上の人たちが満腹になったのです。彼の愛をしっかりと受け止めなければなりません。与えるときは、自分の物です、しかし、受け取った者が、それを活用できるか、あるいは持て余して捨ててしまうか、そこから先は、神様にお任せすれば良いのです。差し出そう、与えようという最初の気持ちが大切だと思います。

#### 【湖の上を歩く】（6：16－21）

夕方になったので、弟子たちは湖畔へ下りていった。そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムにしようとした。既に暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところには着ておられなかった。強い風が吹いて、湖は荒れ始めた。（6：16－18）

夕方、舟に乗り込んだ弟子たちは、イエスが乗っておられないことに気づかないまま、舟を漕ぎ出しました。イエスはきっとみんなより目立たぬところで祈っていたのでしょう。強い風で、湖は荒れ始めました。

25ないし30スタディオンばかり漕ぎだしたころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。イエスは言われた。「わたしだ。おそれることはない。」そこで、彼らはイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。

（6：19－21）

\*1スタディオンは185メートルを表します。

イエスが湖の上を歩いて舟に近づいてこられたので、弟子たちは驚くよりも恐れてしまいました。ユダヤでは幽霊は海の上を歩いてくるといいますから、イエスが舟に乗っていると思っていた弟子たちはどうしていいか分からなかったでしょう。「わたしだ」とイエスが声をかけてくださったところで、ようやく舟に迎え入れたのです。まもなく舟は目指すカファルナウムに着いたのです。

弟子たちは、イエスが神の子であることを分かっています。神の子なら、どんなことができてもおかしくないのに、どんなしるしをみても、神の子だという確信を持つ者はいなかったのです。

#### 【イエスは命のパン】（6：22－59）

その翌日、湖の向こう岸に残っていた群衆は、そこには小舟が一艘しかなかったこと、また、イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気づいた。ところが

、ほかの小舟が数そうティベリアスから、

主が感謝の祈りを唱えられたのちに人々がパンを食べた場所（五千人のパンの場所）へ近づいて来た。群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜し求めてカファルナウムに来た。そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。

（6：22－25）

その翌日、夜のうちにイエス一行が移動したことを知った人々は、あちらこちらとイエスを捜しはじめました。前日の五千人のパンのしるしで、集まっていた群衆の一部は、イエスこそイスラエルをローマから解放してくれる王なのだと思い、必死になって行方をさがしていたのです。

イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためでなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。それこそ、人の子があなた方に与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである」（6：26－27）

イエスを探し回った群衆たちは、イエスを王にすれば地上が楽園になるという望みを捨てきれなかったのです。その群衆に対し、イエスは自分に対する熱心な期待は、イエスが行われたしるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだと言われたのです。そして、「朽ちる食べ物でなく、いつまでもなくならない永遠の命に至る食べ物のために働きなさい」とおっしゃいます。いったいそれはどんなものなのでしょう。それは「人の子があなた方に与える食べ物である」と言われています。明日のパンを心配しなくても、神様をそして神の子イエスを信じることによって生きていけるのだとおっしゃっているのでしょうか。

父である神がイエスに認めて、イエスがあなた方に与える食べ物だと言われるのです。

そこで、彼らが「神の業を行うためには、何をしたらよいのでしょうか」と言うと、イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」

（6：28－29）

彼らは「神の業を行うためには何をしたらいいのか」と言っています。これは、自らも少しのパンで満腹になれるような業を使いたいと言っているのでしょう。イエスは、「神がお遣わしになった方を信じること」つまりイエスを信じるのが神の業だと答えられます。真の霊的食物をくださる方としてイエスを信じるのが大事なのです。

そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。わたしの先祖は、荒野でマンナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてある

とおりです。」（6：30－31）

\*マンナとは、旧約聖書のころ、エジプトから脱出して荒野をさまよっている時代に、食料として神がユダヤ人に毎日与えたもの。

彼らは、先日五千人にパンをわけるといっておおきなしるしを行ったばかりなのに、どんなしるしをみせてくれるのか、モーセが荒野で降らせたマンナのようなしるしをしてくださいますかと、イエスに要求してきます。

すると、イエスは言われた。「はっきり言っておく。モーセが天からのパンをあなた方に与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降ってきて、世に命を与えるものである。」（6：30－33）

ここでも、群衆が考えているパンとイエスの言われるパンでは、大きな隔たりがある。群衆たちはイエスを信じることで、モーセのときのように毎日パンの心配をしなくていいようになればと願っているのです。（モーセ一行は、マンナを食べて気楽に暮らしたわけではなく、新しい自分たちの土地を捜して、毎日ひたすら歩いていたので）しかし、イエスのパンは、イエスを信じて、日々の食物の心配なく、希望を持って毎日生きて行ける日々を支えるものだとおっしゃっているのに、群衆たちはイエスの声を正しく聞いていません。執拗にしるしを見せて信じさせてくれと言っているというのです。これまでのたくさんのしるしで信じなかった彼らは、何をしてほしいのでしょうか。

そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつも私たちにください」と言うとイエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがない。しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見ているのに、信じない。父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る。わたしの元に来る人を、わたしは決しておいださない。わたしが天から降って来たのは、自分の意志で行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠のいのちを得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。

（6：34－40）

「サマリアの女」は「主よ、渴くことがないないように、またここに来なくてもいいように、その水をください」とイエスに頼みました。それと同じように、群衆は「そのパンをいつもわたしたちにください」とイエスに頼みました。働かずして、飢えることなく食べることができるパンが毎日降ってくれば良いと思っているのです。そんな会話の中で、イエスはイエスの真相を明らかにして行かれます。

わたしは、唯一の神から、あなたたちを永遠の命にみちびくために来たのです。そして、それは、わたし自身がパンそのものなのです。わたしの血が渴くことがない飲み物なのです。わたしを信じれば、終わりの日に、かならず永遠の命を授けるでしょう。わたしのもとに来る人をわたしはけっしておいださない。わたしをお遣わしになった方の御心は、一人も失わないで終わりに日に復活させることなのです。

ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から降って来たパンである」と言われたので、イエスのことをつぶやき始め、こう言った「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。そうして『わたしは天から降って来た』などというのか。」イエスは答えて言われた。「つぶやき合うのはやめなさい。わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしの元へ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる。預言者の書に、『彼らは皆、神によって教えられる』と書いてある。父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとに来る。父を見た者は一人もいない。神のもとから来た者だけが父を見たのである。はっきりしておく。信じる者は永遠の命を得ている。わたしは命のパンである。あなたたちの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。しかし、これは、天から下って来たパンであり、これを食べる者は死なない。わたしは天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。

(6 : 41 - 51)

イエスが、モーセと平行するようなパンの与え手であるばかりか、天から降ってくるパンそのものであると宣言されます。第二のモーセとしてイエスを描き、モーセのような預言者以上の存在であると言うことがまさにことが焦点になります。イエスご自身が命の与え手であるばかりでなく、命そのものであるのです。人間に命を直接与えることができるのは、モーセではなくて神であるということイエス自身が指摘しています。ここで意味されているのは、「神と等しいものイエス」ということです。群衆たちは、「これはヨセフの息子のイエスではないか」それが今、どうして「わたしは天から降って来た」などというのかと追求を始める。つまり人間イエスが神と等しいものだとは主張することは、神を冒瀆することだとユダヤ人は言っているのです。イエスは、「父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる」と言います。ここで、旧約聖書のイザヤ書(54 : 13)を引用し、「彼らは皆、神によって教えられる」イエスは学んだ者はわたしのもとに来ると言われています。「父を見た者はひとりもいない。神のもとから来た者だけが父を見たのである」と言われ、神を見た者は誰もいないということは、すでに(1 : 18)で明言されているのですが、父から派遣された子なるイエスのみが神を見たことがある者とだと主張されるのです。命を与え得るものは、イエスのみなのです。逆に言って、イエスのみが天から降って来た命のパンなのです。このパンは、「生きたパン」で、生き生きとしたパン、あるいは命のあふれるパンという

意味にも取れるし、また、命を与えるパンと言う理解もできるのです。

それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と互いに激しく議論し始めた。イエスは言われた。「はっきりしておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければあなたたちのうちに命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物である。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていた時に話されたことである。(6:52-59)

「血を飲み、肉を食べよ。」というイエスの言葉に、それを具体的に思い浮かべて論争が起こりました。ユダヤでは、血を飲むことが禁じられていたからです。しかも、イエスはただ一人。どうやってすべての人間に肉と血を分け与えるというのでしょうか。群衆たちはその言葉が象徴することが分からずに恐れました。

イエスの体と流された血にあずかることで、永遠の命を得るというのは過越祭で小羊を屠ることに強く結びついています。

後半の部分は、現在もキリスト教会で行われる聖餐式に関することだと言っていいでしょう。キリストの体を象徴するパンと、その血を象徴するぶどう酒をいただくことで、イエスを新たに受け入れるのです。これは魔術的なことではなく、イエスがいつも共にいてくださることを新たに思い出すために行われる儀式なのです。

【永遠の命の言葉】(6:60-71)

ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。」イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。「あなたがたはこのことにつまずくのか。それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば・・・命を与えるのは“霊”である。肉は何の欲にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、いのちである。(6:60-63)

「つまずく」とは「石につまづいて転んだ」などと使うだけでなく、信じたことを信じられなくなってしまうという意味でここは使われています。末尾「見るならば・・・」は、イエスが天に上がるのを見たならば、よけいに多くの人たちがつまづくだろうと言う意味だと思われます。

「命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊で

あり、命である」言が命である。すべての被造物を創造したのは言であり、また命を与えたのも言である。その意味では神が命を持っておられ、イエスにまたその命が託されているのですが、聖霊、神の力もまた、その命を持っているのです。霊自体が命であると言えるのです。後になるとイエスご自身が「わたしは命である」と宣言しておられます。

しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。」イエスは最初から信じない者たちがだれであるか、また、ご自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである。（6：64－65）

イエスを信じるか信じないかによって、人間が二つに分割されます。イエスは神と同様にすべてのことを見通しておられることがこのことにも当てはめられています。

そして、言われた。「こう言うわけで、わたしはあなたがたに『父からお許しがなければ、だれもわたしのもとにくることはできない』と言ったのだ」（6：65）

「父からお許しがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない」これは聖霊の働きなしにだれもイエスを信じて告白することができないと言うことを裏返しに行っているに言っています。

このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。そこで、イエスは十二人に「あなたがたも離れて行きたいか」と言われた。シモン・ペトロが答えた。「主よ、わたしたちはだれの所へ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であるとわたしたちは信じ、また知っています。すると、イエスは言われた。「あなたがた十二人はわたしが選んだのではないか。ところがその中の一人は悪魔だ。」イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた。（6：66－71）

たくさんの弟子たちが去って行きました。失意のイエスは最も近くにいる十二人の使徒に「あなたがたも離れて行きたいか」と問われます。シモン・ペテロはみんなを代表して、主を信じていることを言い表します。すると、イエスは突然に裏切り者いるということをあかされます。「十二人はわたしが選んだのではないか」という言葉に、イエスの悲しみがにじみ出ています。選んだ十二人の一人が、その役目を果たさなければならないのです。それはイエスも最初からご存知だったことなのではないでしょうか。それとも、神様から言い渡されたことだったのでしょうか。

## イエスの兄弟たちの不信仰

---

【イエスの兄弟たちの不信仰】（7：1－9）

その後、イエスはガリラヤをめぐっておられた。ユダヤ人が殺そうと狙っていたのでユダヤを巡ろうとは思わなかった。時に、ユダヤ人の仮庵祭（かりいおさい）が近づいていた。イエスの兄弟たちが言った。「ここを去ってユダヤに行き、あなたのしている業を弟子たちにも見せてやりなさい。公に知られようとしながら、ひそかに行動する人はいない。こう言うことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい。兄弟たちも、イエスを信じていなかったのである。そこで、イエスは言われた。「わたしの時はまだ来ていない。しかし、あなたがたの時はいつも備えられている。世はあなたがたを憎むことができないが、わたしを憎んでいる。わたしが、世の行っている業は悪いと証ししているからだ。あなたがたは祭りに上って行くがよい。わたしはこの祭りには上って行かない。まだ、わたしの時が来ていないからである。こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた（7：1－9）

イエスが兄弟たちを尋ねるが、良い顔をされません。これからある仮庵祭にエルサレムへ上京して、業を見せて周りに認められるようにすれば良いのではないかと勧められますが、そういう兄弟たちもまた、イエスを信じてはいなかったのです。仮庵祭には行かないと兄弟たちに言うイエスですが、この直後に上京し、エルサレムの神殿で公然と教え始めるのです。

\* 仮庵祭とは、ユダヤ人が荒れ野をさまよった経験を記念するための祭り。

\* 6章でガリラヤ伝道は終わり、その後のイエスの公的宣教の舞台はもっぱら波瀾万丈のエルサレムとその周辺に移される。7章では秋（9月下旬）の「仮庵祭」が背景になっている。イエスはガリラヤを出て、8章から9章を背景にエルサレムへ行き、エルサレム神殿でユダヤ人たちと論争する中で語られた説話は8章終わりまで続いている。

【仮庵祭でのイエス】(7:10-24)

しかし、兄弟たちが祭りに上って行ったとき、イエスご自身も一目を避けて、隠れるようにして上って行かれた。祭りのときユダヤ人たちはイエスを探し、「あの男はどこにいるのか」と言っていた。群衆の間では、イエスのことがいろいろとささやかれていた。「良い人だ」という者も入れば「いや、群衆を惑わしている」と言う者もいた。しかし、ユダヤ人たちを恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった。

（7：10－13）

祭りには行かないと兄弟たちには言っていたイエスですが、兄弟に知られぬように上京し、祭りの中にいました。ユダヤ人は、「あの男はどこにいるのか」と探しまわっていました。イエスの

ことは何かと話題に上りますが、ユダヤ人がこわいので、みんなささやき合っていました。イエスの評判も、悪くなっていたはいましたが、まだ「良い人だ」と言ってくれる人もいたのです。

祭りも既に半ばになった頃、イエスは神殿の境内に上って行って、教え始められた。ユダヤ人たちが驚いて、「この人は、学問をした訳でもないのに、どうして聖書をこんなに良く知っているのだろう」と言うと、イエスは答えて言われました。「わたしの教えは、自分の教えでなく、わたしをお遣わしになった方の教えである。この御心を行おうとする者は、わたしの教えが神から出たものか、わたしが勝手に話しているのか、分かるはずである。自分勝手に話す者は、自分の栄光を求める。しかし、自分をお遣わしになった方の栄光を求める者は真実な人でありそのことには不義がない。モーセを与えたではないか。ところがあなたたちはだれもその律法を守らない。なぜ、わたしを殺そうとするのか。」群衆が答えた。「あなたは悪霊に取りつかれている。だれがあなたを殺そうというのか。」イエスは答えて言われた。「わたしが一つの業を行ったというので、あなたたちは皆驚いている。しかし、モーセはあなたたちに割礼を命じた。一もつとも、これはモーセからでなく、族長たちから始まったのだが一だから、あなたたちは安息日にも割礼を施している。モーセの律法を破らないようにと、人は安息日であっても割礼を受けるのに、わたしが安息日に全身をいやしたからと言って腹を立てるのか。うわべだけで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい。

(7 : 14 - 24)

隠れながら祭りの中にいたイエスは、祭りが半ばになった時、突然現れて境内に上って教え始められました。イエスは、自分の教えは神から出たものだからだと言われます。すると、今度はイエスが「なぜ、わたしを殺そうとするのか」と言ったことに「あなたは悪霊に取り憑かれています。だれがあなたを殺そうというのか」と言いました。悪霊に取り憑かれているからといって殺す必要はないからです。しかし、その時、ユダヤ人がイエスをメシアと公然と言ったら、会堂から追放すると決めていたのです。イエスも、イエスに従う人たちも、危険な状況になっていたのです。最後に、安息日にことが出てきます。これは、安息日だと言って割礼（男の赤ちゃんの生殖器に施すイスラエルのしるし）はするのに、38年も寝たきりだった人をいやしてあげるのは、どうしていけないのか。とおっしゃっています。これは、以前に読んだベトザタの池であった人のことです。

【この人はメシアか】 (7 : 25 - 31)

さて、エルサレムの人々の中には次のように言う者たちがいた。「これは、人々を殺そうと狙っている者ではないか。あんなに公然と話しているのに、何も言われぬ。議員たちは、この人がメシアだということを本当にみとめたのではなからうか。しかし、わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこからか来られるのか、だれも知らないはずだ。」すると、神殿の境内で教えていたイエスは大声で言われた。「あなたたちはわたしのことを知っており、また、どこの出身かも知っている。わたしは自分勝手に来たのではない



。わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない。わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである。」人々はイエスを捕らえようとしたが、手をかける者はいなかった。イエスの時はまだ来ていなかったからである。しかし、群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて「メシアが来られても、この人とより多くのしるしをなさるだろうか」と言った。

(7 : 25 - 31)

ユダヤ人たちの脅迫にもかかわらず、イエスは平然と教えをつづけておられました。ユダヤ教の当局者たちはイエスを殺そうと思っていた。しかしイエスの公的宣教を多くの人が聞いていたから手を出せずにいました。人々の関心は、メシアならば、出身地など分からず、やって来るのではないかということでした。イエスは、自分をお遣わしになった方のもとから来たと言っていました。しかし、「ナザレの大工の息子イエス」というのは知られていることでした。イエスの時まではまだ時間がありました。一人でも多くの人々が永遠の命を得ることができるよう、イエスは教えられ続けたのです。

【下役たち、イエスの逮捕に向かう】 (7 : 32 - 36)

ファリサイ派の人々は、群衆がイエスについてこのようにささやいているのを耳にした。祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを捕らえるために下役たちを遣わした。(7 : 32)

\*下役とは、もともとはエルサレム神殿の警備員であったが、70年以降、シナゴーク（会堂）においては、シナゴークの宗教教育に携わる人々、あるいは礼拝のためにトーラーを管理して、安息日礼拝ごとにこれを開いた収納したりする仕事に携わる人を指す。

そこでイエスは言われた。「今しばらく、わたしはあなたたちとともにいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。あなたたちは、わたしを探しても、見つけることができない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない。」すると、ユダヤ人たちが互いに言った。「わたしたちが見つけることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人の所へ行ってギリシア人に教えるとも言うのか「あなたたちは、わたしを探しても、見つけることができない。わたしの所に、あなたたちは来ることができない」と彼は言ったが、そのことはどう言う意味なのか。」

(7 : 33 - 36)

その人たちに、イエスは言いました。「今しばらく、ここにいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ返る。あなたたちはわたしを探しても見つけることができない。」下役を遣わしたのは、乱暴をせず、話をして連れてこいということだったのでしょうか。イエスは、「今しばらく」と言われているのに騒動が起こらなかった所から、そう推察されます。イエスが「帰る

」とおっしゃった所は、もちろん、神様のもと、天上を指します。しかし、周りの人々は、イエスをメシアだと信じていないので、追っ手が来ないような遠い所へでも逃げるといえるのかというような想像しかつかないのです。

#### 【生きた水の流れ】（7：37－39）

祭りがもっとも盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渴いている人はだれでもわたしの所に来て飲みなさい。わたしを信じる者は聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」イエスは、ご自分を信じる人々が受けようとしている“霊”がまだ下っていなかったからである。（7：37－39）

仮庵祭のクライマックスに、イエスは立ち上がって大声で言われました。「渴いている人はだれでも私のところに来て飲みなさい」仮庵祭は、元々の意味から収穫祭へと変わっていきました。故に「渴いている人」には「渴いている土地や作物」という意味も入っていると考えられます。これは、サマリアの女にイエスが与えようとした奇蹟とおなじものです」表面だけを聞いていては理解できません。イエスのくださる水は、命の水であり、聖霊（神様のお働き）なのです。

#### 【群衆の間に対立が生じる】（7：40－44）

この言葉を聞いて、群衆の中には、「この人は本当のあの預言者だ」という者や、「この人はメシアだ」と言う者がいたが、このように言う人もいた「メシアはガリラヤから出るだろうか。メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。」こうして、イエスのことで群衆の間に対立が生じた。その中にはイエスを捕らえようと思う者もいたが、手をかける者はなかった。（7：40－44）

イエスの言葉を聞いて、たくさんの祭りの群衆が、それぞれに自分の思ったことを言い合って騒ぎになりました。その主な主張は「本当にあの預言者だ」（モーセの後継者との意味かと思われる）「この人はメシアだ」「メシアがガリラヤから出るだろうか」というような、三つの趣旨になります。ガリラヤから出るだろうかというのは、この本の最初の方で、イエス様が弟子にしようとしたナタナエルが「ナザレから良い者は出るだろうか」と言ったのと同じです。それに加えて、「聖書にはダビデの子孫でベツレヘムから出て来るはずだ」とも言われています。ユダヤ人にとって家系というのは非常に大事なもので、もし、手元に聖書がある方は、一番初めのマタイによる福音書の1ページ目を見てください。すらすらと系図がならんでいて、イエスはダビデの正当な後継者だということを証明しているのです。こんなページが必要なほどに、家系は当時は大事だったのです。

#### 【ユダヤ人指導者たちの不信仰】（7：45－52）

さて。祭司長やファリサイ派の人々は、下役たちが戻って来た時、「どうして、あの男を連れて来なかったのか」と言った。下役たちは、「今まで、あの人のように話した人はいません」と答えた。すると、ファリサイ派の人々は言った「お前たちまでも惑わされたのか。議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか。だが、律法を知らないこの群衆は、呪われている。」彼らの中の一人で、以前イエスを訪ねたことのあるニコデモが言った。「我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめたうえでなければ、判決を下してはならないことになっているではないか。」彼らは答えて言った。「あなたもガリラヤ出身なのか。よく調べて見なさい。ガリラヤからは預言者がでないことが分かる。

(7 : 45 - 52)

逮捕に行っていた下役たちが戻ってきました。祭司長たちはイエスを連れて来なかったと立腹しています。下役たちが捕らえなかった理由は「今まで、あの人のように話した人はいません」でした。誰かに邪魔された訳でもなく、イエスの言葉を聞いて、下役たちは何もせずに帰って来たのです。それを議員たちは「惑わされている」と言いました。議員やファリサイ派の人々のなかには、律法をちゃんと知っているから惑わされたものなどないだろう。といい、群衆については、律法を知らない群衆とバカにした態度を取っています。

議員の中のニコデモは、律法ではまず本人の事情を聞くはずですがと口を出します。このニコデモは、イエスを訪ねて話したことがありました。

ニコデモに対して、祭司長たちは、調べてみればガリラヤから預言者が出ないことが分かるだろうとひどい言葉を投げつけるのでした。ニコデモもガリラヤの出身だったので。

## わたしもあなたを罪に定めない

---

【わたしもあなたを罪に定めない】

(7 : 53、8 : 7 - 11)

イエスは朝早く神殿の境内に入られると、民衆がご自分の所に来たので、座って教えられていました。そこへ、姦通の現場で捕らえられたという女が、律法学者やファリサイ派に連れて来られました。「彼らはイエスに言った『先生、この女は姦通しているときに捕まりました。こう言う女は石で撃ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか』とイエスを試して、訴えるためにこう言ったのである。

(8 : 2 - 6)

イエスは、かがみ込んで、指で地面に何か書き始められました。いったいなにをかいていらしたのでしょうか。律法学者やファリサイ派の人たちは、イエスに何度もしつこく問いかけました。あまりしつこいので、イエスは身を起こして言われました。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」

年長者から順に、一人、また一人と人々は皆立ち去ってしまいました。イエスはずっと、地面に何かを書いておられました。女一人だけになった時、イエスは、身を起こして言われました。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか」女が「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。わたしもあなたを罪には定めない。行きなさい。これからは、もう罪をおかしてはならない」(7 : 10 - 11) こうして、イエスは女の罪の赦しを宣告されました。

【イエスは世の光】 (8 : 12 - 20)

「イエスは再び言われた」と始まっています。ちょうど仮庵祭の終わりで祭りも盛んな日です。何かの話の続きをされようとされているようですが、確定はできません。

「『わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。』と語られます。イエスが世の光で、イエスを信じていれば、暗闇をこわごわ歩くこともない命の光がイエスが味方なのです。

ファリサイ派の人々が言いました。「あなたは自分について証しをしている。その証しは真実ではない。」律法では、自分が自分を証しすることは禁じられていたのです。

イエスは「たとえわたしが自分について証しをするとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。」

(8 : 14 - 15)

イエスは、たとえ自分の証しが有効ではないと言われても、わたしの証しは真実なのだとおっしゃいます。神様のおられる天上から来て、またそこへ帰って行くことを指していますが、周りの人にはわかっていません。

さらに、イエスは言われます。「しかし、あなたたちは、わたしがどこから来て、どこへ行くのか、知らない。あなたたちは肉に従って裁くが、わたしはだれも裁かない。しかし、もしわたしが裁くとすれば、わたしの裁きは真実である。なぜならわたしは一人ではなく、わたしをお遣わしになった父と共にいるからである。あなたたちの律法には、二人が行う証しは真実であると書いてある。わたしは自分について証しをしており、わたしをお遣わしになった父もわたしについて証しをしてくださる。(8:15-18)

イエスは、わたしの裁きは真実だ。父とわたしの二人が証しをするからだと言われました。この日もイエスは捕まりませんでした。まだ、イエスのときではなかったと聖書は語っています。

【わたしの行く所にあなたたちは来ることができない】  
(8:21-30)

そこで、イエスはまた言われた。「わたしは去って行く。あなたたちはわたしを捜すだろう。だが、あなたたちは、自分の罪のうちに死ぬことになる。わたしの行く所に、あなたたちは来ることができない。(8:21-21)

「世の光」の話の後、イエスは更に言われます。「わたしは去って行く」もう自分にはここにはいなくなるとおっしゃっています。そして、あなたたちはわたしを捜すが見つけることはできないと言われます。それは、肉体を持つイエスという存在は去って行くと言うことです。「あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」とても絶望的な言葉です。イエスがいなくなれば、霊の洗礼を受けることができないし、今はまだだれもイエスを信じていないということをおっしゃっているのです。そして「わたしの行く所に、あなたたちは来ることができない」と言われます。それは、人々と違ってイエスが天上の存在であり、その父の元へ帰るから、地の存在である人々は、そこへ行くことができないのです。

ユダヤ人たちが、「『わたしの行く所に、あなたたちは来ることができない』と言っているが、自殺でもするつもりなのだろうか」と話していると、イエスは彼らに言われた。「あなたたちは下のものに属しているが、わたしはこの世に属していない。だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる、わたしは言ったのである。『わたしはある』ということ信じないならば、あなたたちは自分の罪の内に死ぬことになる。」(8:22-24)

ユダヤ人はイエスの言葉がわからず、知らない所で自殺でもするのだろうかと話していました。

もちろん違います。イエスは彼らに言われました。あなたたちは下の者に属しているがわたしは違う。下の者とは天ではなく地から生まれたということを現しています。イエスは、「わたしはある」（８：２３）ということを感じるように言われます。「わたしはある」とは神のことをです。イエスは神と同等であることを感じるようにと教えられているのです。

彼らが、「あなたは、いったい、どなたですか」と言うと、イエスは言われた。「それは初めから話しているではないか。あなたたちについては、言うべきこと、裁くべきことがたくさんある。しかし、わたしのお遣わしになった方は真実であり、わたしはその方から聞いたことを世に向かって話している。」（８：２５－２６）

「あなたは、いったい、どなたですか」というユダヤ人の信じがたい愚問に、イエスは、初めから、つまり、この福音書の最初から、わたしは神と同等の者であることを話つづけてきたと言われます。それは、すべて「わたしをお遣わしになった神様」の言葉を人々に話して来たと言われます。

彼らは、イエスが御父について話しておられることを悟らなかった。そこで、イエスは言われた「あなたたちは、人の子を上げた時に初めて『わたしはある』ということ、また、わたしが自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりに話していることが分かるだろう。わたしをお遣わしになった方は、わたしと共にいてくださる。わたしを一人にしては置かれない。わたしは、いつもこの方の御心に適うことを行うからである。」これらのことを語られたとき、多くの人々がイエスを信じた。（８：２７－３０）

人々は、イエスの御父の話を、「私的なものとし」「個人化し」「特殊な関係」であるように受け止めました。そこで、ユダヤ人は反発し、イエスを捕らえて殺そうと考えたのです。それは、イエスが神と等しい関係であることが唯一信仰のユダヤ人にとって、許しがたいことだったからです。

「人の子を上げた時」つまり、イエスを十字架につけた時、初めて真相が分かる、つまり、天に上げられる時、神と等しい者だということが分かることと話されました。御父はいつもともにいてくださり、イエスを、そしてイエスを信じた人を、決して一人にはされないのです。だから、イエスはいつも、御父の心に叶う行いをして来れたのです。

この話をされた時、多くの人々がイエスを信じたのです。

【真理はあなたたちを自由にする】（８：３１－３８）

イエスは、ご自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」（８：３１）

「本当にわたしの弟子である」という言葉の裏側には、本当は弟子でない人がいると予測をしています。そこには十字架への伏線が見て取れます。「本当の弟子でない人」とは、いまはイエスを信じていると自分でも思っている、大勢の中に入ると、そこに巻き込まれて、反対する者たちの声に信仰を忘れ、イエスを十字架へと追いやってしまう人のことです。

真理つまり、イエスが神の子であることを信じれば、その信仰があなたがたを自由にするとされているのです。

すると、彼らは言った。「わたしたちはアブラハムの子孫です。今まで誰かの奴隷になったことはありません。『あなたたちは自由になる』とどうして言われるのですか。（8：33）

「あなたがたは自由になる」と語りかけられたユダヤ人は、自分たちが罪の奴隷であるとは全く思いもよらず、むしろ自分たちは霊的に自由であると思い込んでいた。決して誰かの奴隷になったこともないとほこらかに主張しました。いったい「あなたたちは自由になる」とはどう言うことですか。

イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる。あなたたちがアブラハムの子孫だということは、分かっている。だが、あなたたちはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉を受け入れないからである。わたしは父のもので見たことを話している。ところが、あなたたちは父から聞いたことを行っている。（8：34－38）

アブラハムの子孫とされていても、奴隷はその家から売り渡されることがあるはずですが。主人の子は売り渡されることはないから、その家にいつまでもいます。子は主人の子であるから主人と同じ権利を行使して奴隷を売ることもまた自由にすることもできるのです。

父なる神の権限を子なるイエスが託されているのです。イエスに置いて罪の許し、罪からの解放を得ることなしに、本当に自由を得ることができないことが指摘されています。そして、十字架の贖罪と復活による命の付与によってその赦しと自由を得るのです。血肉によればユダヤ人たちがアブラハムの子孫であることは明白です。しかしこのユダヤ人たちが神に選ばれてアブラハムの子孫とされているにもかかわらずイエスを殺そうとしているではありませんか。このことによってイエスの言葉を受け入れないということが立証されたのです。

【反対者たちの父】（8：39－47）

彼らが答えて「わたしの父はアブラハムです」と言うと、イエスは言われた。「アブラハム

の子なら、アブラハムと同じ業をするはずだ。ところが今、あなたたちは、神から聞いた真理をあなたたちに語っているこのわたしを、殺そうとしている。アブラハムはそんなことはしなかった。

論争は続いて行きます。ユダヤ人たちは「わたしの父はアブラハムです」と言いました。しかしイエスは「それならばアブラハムと同じ業をするはずだ。アブラハムは地にひれ伏し神の使者をむかえた。（旧約聖書創世記18：2）と反論されます。「アブラハムどこか、あなたたちは神からの真理を聞かず、わたしを殺そうとしているではないか、アブラハムはそんなことはしなかったとイエスは宣べられました。

あなたたちは、自分との父と同じ業をしている。」そこで彼らが「わたしたちは姦淫によって生まれたものではありません。わたしたちにはただ一人の父がいます。それは神です。」という、イエスは言われた。神があなたの父であれば、あなたたちはわたしを愛するはずである。なぜなら、わたしは神のもとから来て、ここにいるからだ。わたしは自分勝手に来たのではなく、神がわたしをお遣わしになったのである。

（8：41－42）

「あなたたちは、自分の父と同じ家業をしているではないか」と指摘したイエスに「わたしたちは姦淫によって生まれたものではありません。わたしたちにはそれぞれにただ一人の父がいます。それは神です。」とユダヤ人が答えました。イエスは、神が父であるなら、あなたたちはわたしを愛するはずだ。とご自分が神に遣わされてここにいると言われます。

わたしのいっていることが、なぜ分からないのか。それは、わたしの言葉を聞くことができないからだ。あなたたちは、悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は最初から人殺しであって、真理をよりどころにしていない。彼のうちには真理がないからだ。悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽りものであり、その父だからである。しかし、わたしが真理を語るから、あなたたちはわたしを信じない。あなたたちのうち、そのいったいだれが、わたしに罪があると攻めることができるのか。わたしは真理を語っているのになぜわたしを信じないのか。神に属する者は神の言葉を聞く。あなたたちが聞かないのは神に属していないからである。（8：43－47）

言っていることを信じないユダヤ人に対して、悪魔についてイエスは語ります。悪魔は最初から人殺しであり、悪魔は真理をよりどころとしない、なぜなら悪魔には真理がないからだと言われます。そして話の途中で、イエスは、「あなたたちのうち、その誰かが、わたしに罪があると攻めることができるのか」と言われます。そして、信じない人たちを神に属していない人々なのだとされるのでした。

【アブラハムが生まれる前から「わたしはある」】

（8：48－59）



ユダヤ人たちが、「あなたはサマリア人で悪霊にとりつかれていると我々が言うのも当然ではないか」と言い返すと（前の書の「あなたたちは悪魔である父から出た者であってその父の欲望を満たしたいと思っているなどの発言に対して言っている）その父の欲望を満たしたいと思っている」などのイエスの発言に対して言い返しイエスはお答えになった。

「わたしは悪霊にとりつかれてはいない。わたしは父を重んじているのに、あなたたちはわたしを重んじない。わたしは、自分の栄光は求めていない、わたしの栄光を求め、裁きをなさる方がほかにおられる。はっきりいっておく。わたしの言を守るなら、その人は決して死ぬことがない。」（8：48－51）

この項で、エルサレム神殿における、また仮庵祭をその場とした、イエスと敵対者との論争はその頂点に達する。

ユダヤ人たちはイエスの前項での発言にたいして、「あなたはサマリア人で・・・」と言い返しに来る。そして、「悪魔にとりつかれている」と言う。これまでも言われたことだが、ユダヤ人たちの目から見るとイエスが精神に異常をきたしているという以上に、人間以上の力がとりついていると感じたのです。

ユダヤ人たちは言った。「あなたが悪霊にとりつかれていることが、今はっきりした。アブラハムは死んだし、預言者も死んだ。ところが、あなたは『わたしの言葉をまもるなら、その人は決して死を味わうことがない』と言う。私たちの父アブラハムよりも、あなたは偉大なのか。彼は死んだではないか。預言者も死んだ。いったいあなたは自分を何者だと思っているのか。」

イエスはお答えになった。「わたしが自分自身のために栄光を求めようとしているのであれば、栄光はむなし。わたしに栄光を与えてくださるのは、わたしの父であって神であって、あなたたちはこの方について、『我々の神だ』と言っている。あなたたちはその方を知らないが、わたしは知っている。わたしがその方を知らないと言え、あなたたちと同じくわたしも偽り者になる。しかし、わたしはその方を知っており、その言葉を守っている。あなたたちの父アブラハムは、わたしの日を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て、喜んだのである。」ユダヤ人たちが、「あなたは、まだ五十歳にもならないのに、

アブラハムを見たのか」と言うと、イエスは言われた。「はっきりいっておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある。』すると、ユダヤ人たちは、石を取り上げ、イエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、神殿の境内から出て行かれた。

（8：54－59）

際限のない論争が繰り広げられます。イエスを神の独り子と信じない限り、イエスの発言はすべて否定されてしまうのです。イエスは「アブラハムが生まれる前から『わたしはある。』」とい

うと、ユダヤ人はイエスの話を信じず、イエスが自分のことを神と同等であると発言したので、神様への冒瀆だと受け取られ、石を投げつけようとしたので、イエスは身を隠して神殿の境内を出て行かれたのです。まだ、イエスの時は来ていなかったからです。

## 生まれつきの盲人をいやす

---

【生まれつきの盲人をいやす】（9：1－12）

さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それもと両親ですか」イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業をまだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。わたしは、世にいる間、世の光である。

（9：1－5）

道で生まれつき目の見えない人を見かけた時、弟子たちがイエスに「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。」と尋ねました。ユダヤ教においては伝統的に罪の結果として禍いや身体に障がいが生ずると考えられていました。今日から考えると非常に誤りですが、神は完全な方であると言う宗教的理解から発していることです。完全である者を神が愛し、これをよしとする理解があり、それに反して不完全な者を神は遠ざけ、これを退けるという理解です。従って全く間違った理解ですが、人間についても身体の障害がある場合、神がよしとされないと理解され、これが勝手に罪と関連づけられていたのです。それで、弟子たちは、イエスに質問したのでした。

「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」（9：3）とイエスはお答えになります。神の業がこの人に現れるためだという答えは、当時、かなり画期的な考え方だったと言えるでしょう。

しかし、神のためにずっと目の見えない生活を強いられて来たこの人の日々は帰って来ない、それで良いのかと考え込んでしまう自分がいます。

イエスはまだ日があるうちに業を行わなければいけないと言われます。「だれも働くことができない夜が来る」というのは今日の状況からは想像もできないような、電気などない暗闇が想像されます。しかし、「イエスはそのあと「わたしは世にいる間、世の光である。」と暗闇を恐れなくても、わたしがいるとおっしゃっています。

こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。そして「シロアムー『遣わされた者』という意味の池ーに言って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。近所の人々や、彼が物乞いであったを前に見ていた人々が、「これは、座って物乞いであったのしていた人ではないか」と言った。「その人だ」という者もいれば「いや違う、似ているだけだ」という者もいた。本人は「わたし

がそうなのです」と言った。そこで人々が「では、お前の目はどうして開いたのか」と言うと、彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに言って洗いなさい』と言われました。そこで、言って洗ったら、見えるようになったのです。人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。(9:6-12)

イエスは生まれつきの盲人をいやされました。周りの人たちは驚くばかりで中には、別人だという人もいくらかいました。どうやって目が開いたのか、興味津々です。でも、この後、イエスがどこへ行ったのかは、彼には分かりませんでした。この人は、ただただ、目が見えるようになった喜びでいっぱいだったのでしょう。

【ファリサイ派の人々、事情を調べる】(9:13-34)

人々は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々の所へ連れて行った。イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであった。そこで、ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方がわたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」ファリサイ派の人の中には、「そのひとは、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」という者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」という者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。そこで、人々は盲人であった人に再びいった。「目を開けてくれたということだが、いったい、おまえはあの人をどう思うのか。」彼は「あの方は預言者です」と言った。

(9:13-17)

前項の盲人を見えるようにしたしるしが、安息日だったためファリサイ派に人々は、前に盲人であった人を連れて来て事情を聞くことにしました。

彼は、どのように良くなったかを話しました。すると周りの人たちは、賛否両論で、治した人のことを言いました。そこで、治してもらった人に尋ねると、「あの方は預言者です」と断言したのするばかりでした。直してもらうまで、彼の目は見えなかったからのですから、人相を聞くことも出来なかったのです。

それでも、ユダヤ人たちはこのひとについて、盲人であったのに目が見えるようになったということを信じなかった。ついに、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、尋ねた。「この者はあなたたちの息子で、生まれつき目が見えなかったというのか。それが、どうして今は目が見えるのか。」両親は答えて言った。「これが私どもの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています。しかし、どうして今、目が見えるようになったかは分かりません。だれが目を開けてくれたのかも、私どもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう」両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れていたからで

ある。ユダヤ人たちは既に、イエスがメシアであると公に言い出す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである。両親が「もう大人ですから、本人にお聞きください」と言ったのは、そのためである。(9：18－23)

ファリサイ派の力は、強力です。齒向かって会堂追放になったりすると、その地で生活して行けなくなるのです。また、当時の安息日も絶対で、それを破ることは大きな罪になるのです。それゆえ、両親は本人に聞いてくれと多くを語らない態度を取ったのでした。

さて、ユダヤ人たちは、盲人であった人をもう一度呼び出して言った。彼らはお前を癒してくれた人は罪人だと決まっていると言います。「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、わたしにわかりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです。」すると、彼らは言った。「あの者はお前にどんなことをしたのか、お前の目をどうやってあけたのか。」彼は答えた。「もう話したのに、聞いてくださいませんでした。なぜまた、聞こうとなさるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」そこで、彼らはののしって言った。お前はあの方の弟子だが、我々はモーセの弟子だ。われわれは、神がモーセに語られたことは知っているが、あの方がどこから来たのかは知らない。」彼は答えて言った。「あの方がどこから来られたか、あなたがたがご存じないとは、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人が言うということをなど、これまで一度も聞いたことはありません。あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかつたはず。」彼らは「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようと言うのか」と言い返し、彼を外に追い出した。(9：24－34)

盲人であった人を、ユダヤ人はもう一度呼び出します。彼らは、いやしてくれた人は罪人だと決まっている。と言います。そこで盲人だった彼は、あの方がどうかは分からないが、目が見えるようになったのは間違いのないと言います。そして、ユダヤ人たちは、どうやって目を開けたのかと今までと同じことを答えるように言います。しかし、彼は、もう話したことなのに、聞いてくれなかった。と発言します。そして、「なぜまた、聞こうとなさるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」と状況が分かって来た彼は、痛烈な皮肉を言います。更に、目を開けてくれた人が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかつたはず。」とユダヤ人に言い返し、ユダヤ人たちは、彼を外に追い出したのでした。

【ファリサイ派の人々の罪】(9:35-41)

イエスは彼が外に出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、「あなたは人の

子を信じるか」と言われた。彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいたのですが。」イエスは言われた。「あなたはもうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」彼が「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためにある。こうして、見えないものは見えるようになり、見える者は見えないようになる。」

イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々もみえないということか」と言った。イエスは言われた「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたがたの罪は残る。」

(9 : 35 - 41)

まっすぐに目を開けてくれた人を信じる、盲目を治してもらった人を会堂から追い出したファリサイ派は、神様が彼にしたことを、見ないふりをしたのです。本当のことを見えなかったと偽るのは、大きな罪になるとイエスはおっしゃいました。

## 「羊の囲い」のたとえ

---

### 10章

#### 【「羊の囲い」のたとえ】（10：1－6）

はっきり言うておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えてくるものは、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである。門番は羊飼いは門を開き、羊はこの声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているのだから、ついて行く。しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声をしらないからである。」イエスは、このたとえをファリサイ派のひとつに話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。

（10：1－6）

パレスチナのこの地方では、羊に名前を付ける習慣がある。羊を飼う生活は、朝、羊飼いたちは自分が委託されている主人の羊の名前を呼んでその囲いから連れ出して、緑の牧草を食べさせ、運動をさせ、また清い水の流れに導き、乾きをいやし、夕方は間違いなく、主人の囲いへ連れ帰る。これが羊飼いたちの一日の労働であり、責任でした。

門から入らない者は、盗人であり強盗であると最初に言われました。それは、間違いなくイエスの敵対者たちです。イエスは一人一人の名前を呼ぶ良い羊飼いです。ファリサイ派の人々は、盗人、強盗と言われているのに気づかなかったのです。

#### 【イエスは良い羊飼いです】（10：7－21）

イエスは言われた。「はっきり言うておく。わたしは羊の門である。わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。（10：7－8）

イエスは言われました。わたしの前に来た者は皆、盗人であり、強盗です」彼らは牧者のように見えたでしょうが、羊を食い荒らす「盗人」だったり、いかさまの司祭だったり、偽りのメシアだったり、ファリサイ派だったりしました。彼らの前で、中に入れないように、イエスは「羊の門」を守って来たのです。そして、羊たちは、知らない声には従わなかったのです。

わたしが門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。わたしは良い羊飼いです。

（10：9－11）

かつて、イスラエルの羊の群れを守った人たちのうち、モーセや真の預言者たちは、心を用いて羊を養いました。その点で、彼らは、「羊の命を得、またそれを豊かに持つため」に来られたイエスご自身の先駆者でした。

良い羊飼いは羊のために命を捨てる。羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。一狼は羊を奪い、また追い散らす。一彼は雇い人で、羊のことを心に掛けていないからである。(10:11-13)

イエスは良い羊飼いは、羊のために命を捨てるとおっしゃいます。それに対して、自分の羊を持たない雇い人は、オオカミが来ると、羊のことなど構わず逃げて行ってしまふのです。オオカミは羊を奪い、また追い散らしてしまいます。雇い人の彼は、日頃から羊のことを心がけていないからです。羊飼いに取っての羊は、命をかけても守り通すものなのです。

わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊をしっており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。

(10:14-15)

「わたしは良い羊飼いである」とイエスはまた言われます。良い羊飼いだから、羊一匹一匹を知っていて、羊の方もイエスのことを知っている(信じている)し、安心して囲いのなかで牧草を食べます。それは、父(神)がわたし(イエス)のことを知っているのと同じなのです。わたしは大切な羊のためなら命を捨てるとイエスは断言なさいました。これは、十字架に向けての言葉ですが、誰も本当にイエスが羊たち(人間の)のために死ぬとは思っていませんでした。

わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群になる。わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは、自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。(10:16-18)

「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊も導かなければならない」イエスは、今囲いに入っていない羊、つまり、今、まだイエスを知らない人、知ってはいるけど、囲いに入ることをためらっている、多くの羊に心を馳せます。それは、ユダヤ人に限らず、世界中の人々に、私たちに向けたメッセージでもあります。イエスは良い羊飼いですから、無理強いはしません。それでも、外から来た羊は「わたしの声を聞き分ける」とおっしゃっています。そ



れは、この時代だけでなく、二千年後も同じなのです。

そして、一人の羊飼（イエス）に導かれて、一つの群れになるのです。イエスは羊のために命をかけてオオカミや「盗人」と戦われ、命を捨てます。でも、それはまた、命を受けることになっているのです。イエスはけっして十字架の上で息絶えたままではないのです。そのように羊を守るので、神様はイエスを愛してくださいます。

イエスは「だれもわたしから命を奪う事はできない。わたしは自分で捨てる」とおっしゃいます。御自分の主体的な選びによって、イエスは命を捨てられるのです。そして、神様から受けた掟によって、その命を再び受けることもできるのです。

「この話をめぐって、ユダヤ人たちの間にまた対立が生じた。」多くのユダヤ人は言った。「彼は悪霊に取り付かれていて、気が変になっている。なぜ、あなたたち彼の言うことに耳を貸すのか。」ほかの者たちは言った。「悪霊に取りつかれた者は、こう言うことはいえない。悪霊に盲人の目が開けられようか。（10：19－21）

この話をめぐって、ユダヤ人たちの間に対立が生じたと書かれています。多くのユダヤ人は、イエスを悪霊に取り付かれていると否定しました。しかし、ほかの者の人たちは、イエスを信じるとは言わないのですが、ただ、生まれつきの盲人の目を開けたことから悪霊に取り付かれている人とは違うといったのです。

【ユダヤ人、イエスを拒絶する】（10：22－42）

そのころ、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。冬であった。  
（10：22）

\*神殿封建記念祭とは、今も行われている祭りです。「宮清めの祭り」とも言われています。神殿が崩壊したあと、ユダヤ人はバビロン捕囚から帰って来て、第二神殿を再建しますが、シリアの王によって異神をまつる神殿とされてしまいます。それを取り戻し浄化して神殿が新たに返って来たことを祝うお祭りでした。

イエスは、公生涯最初になされたのが、神殿の浄化「宮清め」でした。そのため、ここから章が改まって、新しい展開が起こることを暗示しています。

イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。すると、ユダヤ人がイエスを取り囲んで言った。「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」

イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて、証しをしている。しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊で

はないからである。わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決してほろびず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはない。わたしと父とは一つである。」

(10:23-30)

イエスは、羊のたとえをもう一度使って、ユダヤ人たちに答えられます。父の名によって行う業がイエスについて証しているのに、あなたたちは信じない。それは、あなたがたがわたしの門の中の羊でないからだと言われます。わたしの囲いの中にいる羊は、わたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っていて、彼らはわたしを信じて従う。わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。わたしの父がわたしにくださったもの（イエスの信者たち）は、すべてのものより偉大である。だから、わたしは盗人から彼らを守る。だれも父の手から奪うことはできない。わたしと父とは一つであるからだとおっしゃったのです

ユダヤ人たちは、イエスを石で撃ち殺そうとして、また石を取り上げた。すると、イエスは言われた。「わたしは父が与えてくださった多くの良い業をあなたたちに示した。その中のどの業のために、石で撃ち殺そうとするのか。」(10:31-32)

ユダヤ人たちは、イエスの話が終わると激昂して石で撃ち殺そうとして石を手に持ったのです。それは、イエスが人間でありながら、「わたしと父とは一つである」とはっきりと神様と同等であるという言葉が言われたからです。それは、神に対してのひどい侮辱だと受け取られたのです

ユダヤ人は答えた。「善い業のことで石で撃ち殺すのではない。神を冒瀆したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。

(10:33)

ずっとイエスは、神である、父の子であると言い続けてきました。ユダヤ人たちには、それを侮辱としか受け取れなかったのです。イエスの言葉を信じるができなかったのです。ユダヤ人やファリサイ派より、サマリヤ人やガリラヤ人の人々がイエスを信じたのです。

そこで、イエスは言われた。「あなたたちの律法に『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。神の言葉を受けた人たちが『神々と』そして、聖書が廃れることはあり得ない。それなら、父から聖なる者とされて世に遣わされたわたしが、『わたしは神の子である』といったからとて、どうして『神を冒瀆している』というのか。もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。しかし、行なっているのであれば

、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう。」そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。

(10:34-39)

イエスは律法に、神の言葉を受けた者は神々と呼ばれていると書いてあると言われます。わたしがどうして、神を冒瀆していると言われるのかと反論されました。そして、わたしが信じれないなら、わたしの業を信じるように言います。しかし、ユダヤ人たちは、聞く耳を持たず、無理矢理にイエスを捕らえようとしませんが、イエスは追手から逃れて、去って行かれたのです。たくさんのイエスのしるし(業)を見たり、聞いたりしても、まったく心を開いてイエスを信じない人は、最後までかたくなであり続けるのです。

イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所に言って、そこに滞在された。多くに人がイエスのもとにきて言った。「ヨハネは何のしるしも行なわなかったが、彼がこの方について話したことは、すべて本当だった。」そこでは多くの人がイエスを信じた。  
(10:40-42)

エルサレムでは、いつ捕まるか分からない状況になってきました。しかし、まだ、「イエスの時」は来ていません。イエス一行は、ヨルダン川の向こう側、最初に洗礼者ヨハネが洗礼を授けていたところへ行き、滞在されました。そこでは、人々はヨハネはしるしを行なわなかったが、言っていた「わたしの後に来る人」について話していたことはすべて本当だったと話していました。そこでは、多くの人がイエスを信じたのです。

## ラザロの死

---

【ラザロの死】（11：1－16）

ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロと言った。このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足を拭った女である。（12：1－8に出てきます）

（11：1－2）

ラザロと姉妹はイエスと本当に親しくしてしていました。

姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである」イエスは、マルタとその姉妹と

ラザロを愛しておられた。（11：3－5）

イエスが「この病気は死で終わるものではない」と言われたので、弟子たちは死んでしまうような病状ではないと思っていました。イエスは続けて「神の栄光のためである」とラザロの死とその復活を言われましたが弟子たちは、それがどういう意味か分りませんでした。マルタとその姉妹とラザロをイエスはとても大切に思われていました。

ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。それから弟子たちに言われた。「もう一度ユダヤに行こう。」弟子たちは言った。「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。」（11：6－8）

ラザロの病気の報を聞いてから、「もう一度ユダヤに行こう。」とイエスが言われた時、弟子たちはラザロのことよりも、イエスの身を案じて、石を打って殺そうとする所へ、また行かれるのですか。殺されるかもしれませんと心配しました。

イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまづくことはない。この世の光を見ているからだ。しかし、夜歩けば、つまづく。その人の内に光がないからである。

（11：9－10）

イエスの身を心配する弟子たちに「昼間は十二時間あるではないか」とイエスは言われました。これは、イエス自身が「世の光」と言われていることから、イエスの光のあるうちに信じて歩けば大丈夫だと言われたのです。しかし、間もなく夜が来ます。それまでに信じなければ、

夜道でつまづくことになります。人間のうちには光はないからであるとおっしゃいました。これは、イエスがやがていなくなるという予告でした。

ここで使われている「つまづく」という表現は、実際の道でつまづく、というだけでなく、信仰を失うという意味でも言われています。これで、イエスがやがていなくなるという予告でもありました。

こうお話になり、また、その後で言われた。「わたしたちの友、ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」と言った。イエスはラザロの死について話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りについて話されたものと思ったのである。そこで、イエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたが信じるようになるためである。さあ。彼の所へ行こう」するとディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と言った。(11:11-16)

ラザロの死は、イエスが死をも従わせる存在であることを見て、信じるようになるためだと言われました。「さあ、彼の所へ行こう」と言うイエスに、ディディモと呼ばれるトマスという弟子は、危険なユダヤの地へ行くために「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と昂揚して言ったのでした。

#### 【イエスは復活と命】(11:17-27)

さて、イエスが行ってご覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日も立っていた。ベタニアはエルサレムに近く、15スタディオン(1スタディオン=約185メートル、なので2.8キロメートル)ほどの所にあった。マルタとマリアの所には、多くのユダヤ人が兄弟ラザロのことで慰めに来ていた。(11:17-18)

ラザロは死後四日経っていて、仮死状態であるとか、復活を信じない者が疑うような状態ではありませんでした。ユダヤの葬式は、本葬が七日続き、最初の三日間は泣く日でした。ですから、イエスがいらしたのは、泣く日が終わった所でした。ユダヤ人の共同体意識は非常に濃厚で、たくさんの方が弔問に訪れていたと考えられます。

マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた。マルタはイエスに言った「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかったことでしょうに。しかし、あなたが神にお願いなさることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。イエスは言われた

。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」マルタは言った「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」（11：20-27）

マリアはイエスの言葉を信じて、ラザロの復活を信じますと言いましたが、死後四日も立っているラザロに、一体何が起こるのかは分かりませんでした。

【イエス、涙を流す】（11：28-37）

マルタは、こう言ってから、家に帰って姉妹のマリアを呼び、「先生がいらして、あなたをお呼びです。」と耳打ちした。マリアはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとへ言った。イエスはまだ村には入らず、マルタが出迎えた場所におられた。家の中でマリアと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が急に立ち上がって出ていくのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、後を追った。マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して言われた。「どこに葬ったのか。」人々は「ご覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようににはできなかつたのか」と言う者もいた。（11：28-37）

イエスは、まっすぐに墓へいこうとして、まだ村には入らず、マリアを待っていらっしゃいました。この日、まだ、大勢のユダヤ人が家において、マリアやマルタを慰めていました。マルタはイエスが呼んでいらっしゃることを、マリアに小声で知らせたので、急に立ち上がったマリアに驚きながらも、墓へ行くのだろうと周りに人は思いました。墓と言っても、私たちの想像する墓とは違って、洞窟のようになったところに、遺体が安置されていました。そこへ行って泣くこともよくあることでした。

マリアは、マルタが言ったのと同じ言葉を、イエスに対して言いました。兄弟の死の悲しみのなかで、ふたりでこう言い合っていたのではないのでしょうか。

「イエスは心に憤りを覚え、興奮して言われた」とあります。このときのイエスの憤りは何だったのでしょうか。それは、マルタとマリアの泣く姿によって、心を揺さぶられ、深く同情したことなのです。誰かに怒っていらっしゃる訳ではないのです。心を揺さぶられたことを憤りという言葉で表現しているのです。人々の傷ついた心と悲しみの深さに、イエスはこみあげてくるもの

があったのでしょ。

イエスは、墓の中では、先ほどの憤りではなく、悲しみの涙を流されました。そばにいたユダヤ人たちは、「どんなにラザロを愛しておられたことか」と人々は言った。

【イエス、ラザロを生き返らせる】

( 1 1 : 3 8 - 4 4 )

イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石で塞がれていた。イエスが「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが「主よ、四日も立っていますから、もうにおいます」と言った。イエスは「もし信じるなら、神の栄光が見られると、いっておいたではないか」と言われた。人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを彼らに信じさせるためです。こう言ってから「ラザロ、出て来なさい」と大声で呼ばれた。すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆い包まれていた。イエスは人々に「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。

( 1 1 : 3 8 - 4 4 )

イエスは天を仰いで神様にお祈りをなさいました。それは、「願いを聞き入れてくださって感謝します」という、もうすでにしるしが起こっていることを感謝する祈りでした。そして、「ラザロ、出て来なさい」と大声で呼ばれると、死後四日も立っているラザロが手足に布を巻き付けたまま出て来たのです。

神様は必ず願いを叶えてくださる。信じて祈り、それから、成就したときのことを思って感謝の先取りをすること。これが本来の祈りなのです。「できれば」とか「どうせダメだろうけど」などというのは祈りにはならないのです。必ず叶えてくださるという気持ちを100%にするのは、難しいことですが、できないことではないのです。

【イエスを殺す計画】 ( 1 1 : 4 5 - 5 7 )

マリアのところへ来て、イエスのなさったことを目撃したユダヤ人の多くは、イエスを信じた。( 1 1 : 4 5 )

しかし、中には、ファリサイ派のもとへ行き、イエスのなさったことを告げる者もいた。そ

ここで、祭司長たちとファリサイ派の人々は最高法院を招集して言った。「この男は多くのしるしを行なっているが、どうすればよいかこのままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そして、ローマ人が来て、その神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう。（11：46－48）

死者を甦らせたという大きなしるしに、祭司長たちやファリサイ派は動揺しました。このままでは、皆がイエスを信じるようになってしまう。そんなことになったら、ローマ人が来て神殿も国民も滅ぼしてしまうと心配を始めました。彼ら一人一人の胸の内を見れば、まず、自分の身分が危なくなるということも絡んできます。

彼らの中の一人でその年の大司祭であったカイアファが言った。「あなたがたは何も分かっていない。一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が滅びないですむ方が、あなたがたに都合だとは考えないのか。」

（11：49－50）

その年の大司祭であったカイアファは「一人を犠牲にして、国民全部を守ればよい」と発言しました。暴動が起こるとローマが攻めて来たり、祭司長たちの責任が問われる場合もあるので、イエス一人の犠牲で全体が滅びないように立ち回ろうと言うのです。

これは、カイアファが自分の考えから話したのではない。その年の大司祭であったので、預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ、と言ったのである。この日から、彼らはイエスを殺そうと企んだ。（11：51－53）

カイアファが「預言して」という部分には、非常に疑問が残ります。

それでイエスはもはや公然とユダヤ人たちの間を歩くことはなく、そこを去り、荒れ野に近い地方のエフライムという町に行き、弟子たちとそこに滞在された。

（11：54）

エルサレムの指導者たちがイエスを捜して生け贄にするという決定をしたために、イエス一行は公然とユダヤ人のいる所に居られなくなりました。通報される恐れがあるからです。彼らは、荒れ野に近い地方のエフライムというところで、身をひそめて滞在するしかありませんでした。

さて、ユダヤ人の過越祭が近づいた。

多くの人が身を清めるために、過越祭の前に地方からエルサレムへ上った。彼らはイエスを捜し、神殿の境内で互いに言った。「どう思うか。あの人はこの祭りにはこないのだろうか。」祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスの居どころが分かれば届け出よと、命令を出して



いた。イエスを逮捕するためである。(11:55-57)

ユダヤ人の大事な祭りである過越祭が近づいてきました。多くの人がエルサレムへと集まってきます。「どう思うか。あの人はこの祭りにはこないのだろうか。」と言った人は、イエスを信じて会いたいと思った人でしょうか、それともイエスを見つけて通報するつもりの人でしょうか。どちらか分かりませんが、イエスを逮捕するために、イエスの居どころが分かれば届け出よという命令が出ていました。

\*過越祭とは、かつてエジプトで奴隷にされていたユダヤ人が自分たちの生きる場所を求めてエジプトを脱出したことを記念する祭り。

## ベタニアで香油を注がれる

---

【ベタニアで香油を注がれる】（12：1－8）

過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。（12：1－2）

イエスはエフライムにひっそりと滞在されていましたが、過越祭の六日前に、ベタニアのマルタとマリアとラザロの暮らす家を訪ねられました。

そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を1リトラ持ってきて、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。（12：3－3）

とても純粋で非常に高価なナルドの香油をマリアが持ってきて、イエスの足に塗り、自分の髪でぬぐったのです。1リトラは約300グラムです。家の中は香油の香りでいっぱいになりました。マリアは、ラザロを復活させていただいた感謝と、イエスへの信頼と愛を表すために、このようなことをしたのでした。

弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。「なぜ、この香油を300デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。彼は盗人であって、金入れをあくまであずかっているが、その中身をごまかしていたからである。（12：5－6）

イエスの弟子のユダが、その香油を300デナリオンで売って、貧しい人々に施すべきだったとマリアを責めました。1デナリオンは労働者の一日の賃金ですから、約1年分。マリアが使った香油がどんなに高価だったか分かります。

ここに出てくるイスカリオテのユダは、後にイエスを裏切ることになるのですが、イエス一行のお金を管理する立場だったようです。しかもその中身をごまかしていたと書かれています。ユダに風当たりが強いのは、ヨハネ伝の特徴でもあります。

イエスは言われた。「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。貧しい人々はいつもあなた方と一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。」（12：7－8）

そのようなユダの言動に、イエスは言われました。貧しい人々にはいつでも施せるが、わたしは

いつも一緒にいるわけではない。イエスは、十字架にかけられるその日が近づいていることを知って、最後の別れにラザロの所へ来られたのでしょ。そこで、マリアは間近に迫っているであろう逮捕を感じとっていたのかもしれない。イエスは香油を注がれて、葬りの準備ができたことを、感謝したのです。また、マルタが甲斐甲斐しく給仕をしてくれることにも、心から感謝しておられたと思います。

#### 【ラザロに対する陰謀】（12：9－11）

イエスがそこにおられるのを知って、ユダヤ人大群衆がやって来た。それはイエスだけが目当てではなく、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった。祭司長たちはラザロをも殺そうと謀った。多くのユダヤ人がラザロのことで離れて行って、イエスを信じるようになったからである。（12：9－11）

前の項の油注ぎの続きとして、この箇所が書かれています。過越祭でエルサレムに来ていたユダヤ人の群衆は、エルサレムからほど近いベタニアにイエスがおり、彼が甦らせたラザロも居ることを知って、群れをなして、イエスを、そしてラザロを見るためにベタニアに押し掛けて来たのです。多くの人々がイエスが甦らせたラザロの出来事でイエスの側へとなびいていたことで、祭司長たちは、ラザロをも殺そうと計画を始めました。

#### 【エルサレムに迎えられる】（12：12－19）

その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来ると聞き、ナツメヤシの枝を持って迎えに出た。そして、叫び続けた

「ホサナ。

主の名によって来られる方に、祝福があるように、

イスラエルの王に。」

イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のようにかいてあるとおりのである。

「シオンの娘よ、恐れるな。

見よ、お前の王がおいでになる、

ろばの子に乗って。」

イエスがラザロを墓から呼び出して死者のなかからよみがえらせたとき一緒に居た群衆は、その証しをしていた。群衆がイエスを出迎えたのも、イエスがこのようなしるしをなさったと聞いたからである。そこでファリサイ派の人々は互いに言った。「見よ、何をしても無駄だ。世を挙げてあの男について行ったではないか。」

（12：12－19）

「その翌日」

過越祭の六日前にマリアの油注ぎがあったので、エルサレム入城のこの日は、過越祭の五日前。

「なつめやし」

この地方に多い植物で、これを切って持って迎えたり、地面に敷いた。

\*「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、イスラエルの王に。」

ホサナは、「今、お救いください」というヘブル語。それに続く文は旧約聖書にある詩編118：25－26から。最後のイスラエルの王には、熱狂した市民が付け加えた言葉。これらの群衆のほとんどは、ローマの支配から救ってくれる民族的英雄を願っていたと思われる。

「イエスはろばの子を見つけてお乗りになった」メシアがろばの子に乗ってくると書いてある旧約聖書ゼカリヤ書9：9の記述にのっとって、イエスがされた行動。

弟子たちは、最初これらのことが旧約聖書とつながることだと分かりませんでした。イエスが栄光を受けられたとき、すなわち、十字架にかけられたときに、思い起こすことになるのです。死者の中からよみがえったラザロを見た者はそれを証しました。そのようなしるしがあると聞いていたからです。そのような騒動を見て、ファリサイ派の人々は、互いに言っていました。「見よ、なにをしても無駄だ。世を挙げてあの男について行ったではないか。」

【ギリシア人、イエスに会いにくる】

(12：20－26)

さて、祭りの時礼拝するためにエルサレムに上って来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた。彼らはガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。フィリポは行ってアンデレに話、アンデレとフィリポは行って、イエスに話した。イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。わたしに仕えようとする者、わたしに従え、そうすれば、わたしのいるところに、わたしの仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」

(12：20－26)

過越祭の礼拝のために、エルサレムへたくさんの方が上ってきました。その中に何人かのギリシア人がいました。かれらはユダヤ教への改宗者でした。彼らはガリラヤのベトサイダ出身のフィ

リポのもとをまず尋ねました。フィリポの名前がギリシャ名で、ギリシャ語が話せたからでしょう。そして、「イエスにお目にかかりたいのです」と申し出ました。フィリポは、同郷のアンデレに話をし、二人でイエスのところへ行ってギリシア人のことを話しました。

するとイエスは「人の子が栄光を受ける時が来た。（十字架にかかる時のこと）はっきりしておく。一粒の種は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ。また、この世で自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で死を恐れぬ者は永遠の命を得る。わたしに仕えようとする者は、わたしに従え（つまり、共に死ぬということ）そうすれば、父はその人を大切にしてください。」

このような厳しい言葉を、イエスは口にされました。フィリポとアンデレは、待っていたギリシア人にこの教えをどんな風に伝えたのでしょうか。

### 【人の子は上げられる】（12：27－36）

「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか『父よ、わたしをこのときから救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこのときのために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためでなく、あなたがたのためだ。今こそ、この世が裁かれる時、今、この世の支配者が追放される。わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。イエスは、ご自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。すると、群衆は言葉を返した「わたしたちは律法によってメシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子はあげられなければならない、とどうして言われるのですか。その『人の子』とは誰のことですか。」イエスは言われた。光は、今しばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるためには、光のあるうちに、光を信じなさい。（12：27－36）

イエスは、十字架に上げられるときが迫って来るのを感じて、心の動揺を覚えていらっしやいました。この思いを御父に何と言って祈ろうかと考えていらっしやいます。「父よ、わたしをこのときから救ってください。」と言おうか、と思った時、そうだ、わたしはまさにこのときのために来たのだ。と思い返されます。そして、「父よ、御名の栄光を現してください」と祈られました。これは、「わたしの思いではなく、御父の御心がなりますように」という意味です

イエスの祈りに、すぐに天からの声が答えました。不思議なことに、いつもはイエスにだけ聞こえるはずの御父の声が、周りの人たちにも聞こえたのです。それは、聞く耳のある者には、天使がイエスに話しかけたように聞こえ、他の人には、雷が鳴ったように聞こえました。すると、イ

イエスは言われました。この声が聞こえたのは、イエスのためではなく、そばで聞いていた人々のためです。

今こそ、この世が裁かれる時、今、この世の支配者が追放される。わたしは地上から上げられる時、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」イエスはご自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。すると、群衆は言葉を返した。「わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならない、とどうして言われるのですか。その『人の子』とはだれのことですか。」イエスは言われた。「光は今しばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子のために、光のあるうちに、光を信じなさい。」

(12 : 31 - 36)

イエスの発言に言葉を返した者がいました。「わたしたちは律法でメシアは永遠におられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならないのですか。『人の子』とは誰のことですか。」この答えにイエスは直接は答えず、「光は今しばらく、あなたがたの間にある。暗闇を歩けば危険も多いし、どこへ行くのか分からなくなる。光があるうちに信じなさい」と言われました。イエスが地上にいるうちに信じなさいと言うことです。そして、天上に上げられ、目に見えなくなっても、イエスが共にいらっしゃることをいつも感じていられるようになりなさいという意味なのでしょう。それには、残された時間が差し迫っていると感じます。

【イエスを信じない者たち】 (12 : 36 - 41)

イエスはこれらのことを話してから、立ち去って彼らから身を隠されました。イエスは、いったん群衆から離れられたのです。彼らのことを祈るためであり、また、ご自分の最後に向けて心を整えておられたのではないのでしょうか。

この項は、二章から十二章の締めくくりと言うべき箇所になっています。一節の「このように多くのしるし」とあるのは、二章からのしるしすべてを指しています。それでも信じない人々について、十字架が迫っているこの時にどう思われていたのでしょうか。

「主よ、誰がわたしたちの知らせを信じましたか。

主の御腕は、だれに示されましたか」

(旧約聖書 イザヤ書 53 - 1)

このような拒絶を受けるとしても神の言葉を語るというのは、預言者がみな、通って行った道でした。イザヤのこのときの思い、信じてもらえないと言う事実は、まさにそのとおりであると思いつつ、この箇所を口ずさまれたのではないのでしょうか。

また、イザヤは語っています。

神は彼らの目を見えなくし、

その心をかたくなにされた。

こうして、彼らは目で見ることなく、

心で悟らず、立ち帰らない。

わたしは彼らをいやさない。

イザヤはイエスの栄光を見たので、このように言い、イ

エスについて語ったのである。

(旧約聖書 イザヤ書 12-41)

この言葉には、「イザヤは、イエスの栄光を見たので、このように言い」という文章がついています。

とはいえ、議員の中にもイエスを信じる者は多かった。ただ、会堂から追放されるのを恐れ、ファリサイ派の人々をはばかりて公に言い表せなかった。彼らは、神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好んだのである。

(12:42-43)

イエスの話やしるしで、イエスを信じるようになるが、立場上、それを公表すると、その場を追いやられてしまう。こう言う場合、どうするのが良いかは、簡単に決められるものではありません。それぞれの事情もあるでしょうし、公表した後の周りの反応などを考えるでしょう。この時人間の誉れを好んだとしても、それは、彼に与えられた重大な任務のためかも知れません。

いえ、ただ、恐れだけかも知れません。

遠藤周作の本には、強い人と弱い人がいるのだと言うことが語られています。卑屈に聞こえるかも知れませんが、例えば、熱さに強い人と弱い人がいて、お前の神を捨てると熱い温泉の湯を背中に流された時、心は同じだったとしても、熱さに強い人は、耐えるかも知れませんが、熱さに弱い人は、屈してしまうのではないかということです。みんな同じ条件のもとで生きているのではないのです。心の強さ弱さについても、遠藤は語っています。生まれつき強人も弱い人もいます。強い人には時として、弱い人のつらさが分らないことがあるということです。

【イエスの言葉による裁き】 (12:44-50)

イエスは叫んで、こう言われた。「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方を信じるのである。わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである。わたしを信じる者がだれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世にきた。わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはそのものを裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。わたしを拒み、わたしの言葉を受

け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にそのものを裁く。なぜなら、わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになった父が、わたしのいうべきこと、語るべきことをお命じになったからである。父の命令は永遠の命であることを、わたしは知っている。だから、わたしが語ることは、父がわたしに命じられたままに語っているのである。」（12：44－50）

イエスが人々に呼びかけています。このイエスの説教の中には、新しい内容はありません。真理にはたくさんの言葉はいらないのでしょう。これまで、何度も人々に話したことを繰り返して語っておられます。「イエスは叫んで」とあるように、いつもより力を込めて話しておられます。イエスご自身が、最後の日が迫っていることを分かっておられ、それまでに一人でも多くの人を救いたいと思っらっしゃるのです。「わたしを見る者は、わたしが遣わされた方を見るのである」（12：45）とありますが、これは、今のイエスを見るのではなく、父なる神を見ているということです。

イエスの言葉を信じない人たちに、終わりの日に裁かれることになるから、わたしの言葉を信じるように言っておられます。

そして、最後に、「わたしが語ることは父がわたしに命じられたままに語っているのである」と人間としてここに見えるイエスが言っているんじゃない、神からの言葉を伝えていることを強調して、神を信じるように、真剣に、呼びかけてくださっているのです。



## 弟子の足を洗う

---

【弟子の足を洗う】（13：1－20）

さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。夕食の時であった。すでに悪魔はイスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。（13：1－2）

イエスが十字架にかかる前の最後の晩餐でのことです。イエスは、父の元へ移る（すなわち、この世での死）を悟り、弟子たちを「愛して、この上なく愛し抜かれた」とあります。この上なく愛し抜かれたとはどんな心情なのでしょう。最後の時間まで、ギリギリまで弟子たちに語り、教え、そして、ご自分が天上へ行かれた後は、弟子たちがお互いに、このように深く愛し合って進んでほしいというのが、イエスの思いでした。夕食の時、イスカリオテのシモンの子ユダは、すでにイエスを裏切ることを決心していました。それは、悪魔の仕業としか思えないことでした。

イエスは、父がすべてご自分の手にゆだねられたこと、またご自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水を汲んで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいで拭き始められた。シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください。と言うと、イエスは「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何の関わりもないことになる」と答えられた。そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いものだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清い訳ではない。」イエスは、ご自分を裏切ろうとしている者が誰であるかを知っておられた。それで「皆が清いわけではない」と言われたのである。

（13：3－11）

イエスは、ご自分の使命（すべての人が神を信じて永遠の命を手に入れること）また、御自分が神のもとから来て、神のもとへ帰ろうとしていることを悟り、突然食事の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、（これは命を捨てられたという象徴です）

弟子たちの足を洗い始められました。イエスは、この中に、裏切ろうとしている者がいるのを知っておられました。しかし、その弟子の足も洗われました。

さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』と呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。はっきり言っておく。僕は主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりはしない。このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである。わたしは、あなたがた皆について、こう言っているのではない。わたしはどのような人々を選び出したか分かっている。しかし、『わたしのパンを食べている者が、わたしに逆らった』（旧約聖書 詩編41：10）という聖書の言葉は実現しなければならない。ことの起こる前に、今、言っておく。ことがおこったとき『わたしはある』ということ、あなたがたが信じるようになるためである。はっきり言っておく。わたしの遣わす者を受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」

(13：12－20)

イエスは全員の足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着かれました。そして、「今、わたしがしたことが分かるか」と話始められました。「今日は師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、「今後、あなたがた同士でも、同じようにしなければならない。」そうすることで、互いに愛し合いなさい。

あなたたちの中に裏切り者がいる。自分がどんな弟子を選び出したか分かっている。聖書に「わたしの信頼していた仲間 わたしのパンを食べる者が威張ってわたしを足げにします。」（旧約聖書 詩編41：10）とある言葉が実現しなければいけない。

「はっきり言っておく。わたしの遣わす者を受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」とイエスは言われます。つまり、イエスがあなたがたに遣わした者（神）を受け入れるなら、それはイエスを受け入れるのと同じです。また、イエスを受け入れる者は、イエスを遣わされた神を受け入れるのです。

【裏切りの予告】（13：21－30）

イエスはこう話し終わると、心を騒がせ、断言された。「はっきり言っておく。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている。」弟子たちは、誰について言っておられるのか察しかねて、顔を見合わせた。イエスのすぐ隣には、弟子たちの一人でイエスの愛しておられた者が食事の席に着いていた。シモン・ペトロはこの弟子に、誰について言っておられるか尋ねるように合図した。その弟子が、イエスの胸元に寄りかかったまま、「主よ、それは誰のことですか」と言うと、イエスは、「わたしがパン切れを浸して与えるのがその人だ」と答えられた。それから、パン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダにお与えになった。ユダがパン切れを受け取ると、サタンが彼の中に入った。そこで、イエスは「しようとしていることを、

今すぐ、しなさい」と彼に言われた。座に着いていた者は誰も、なぜユダにこう言われたのが分からなかった。ある者は、ユダが金入れを預かっていたので、「祭りに必要なものを買いなさい」とか、貧しい人に何か施すようにと、イエスが言われたのだと思っていた。ユダはパン切れを取ると、すぐ出て行った。夜であった。

食事中にイエスから「裏切り者」がいると伝えられ、弟子たちは動揺しました。そして、イエスがその人物にパン切れを渡すとサタンがユダの中に入ったとあります。ユダの裏切りはすべて神のご計画だったのでしょうか。その役を背負わされたユダをイエスは最後まで愛されたのでしょうか。

このあと「夜であった」と記されています。これは、光と闇の世界の闇の方へユダが行ってしまったこと、闇に心をとらわれてしまったこと、など、短い一行が、すべてを物語っています。また、その家の中には、今、光のもとがあるけれど、いつまであるのでしょうか。外に出たら闇の世界で、いつ信じていることが変わるかもしれない群衆が生きているところでもあります。また、ユダヤ教の指導者たちも、自分たちを守るためにイエス一人にすべてをなすり付けている闇の世界にいるのです。

#### 【新しい掟】（13：31－35）

さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。あなたがたはわたしを捜すだろう。『わたしが行くところにあなたたちは来ることができない』とユダヤ人たちに言ったように、今、あなたがたにも同じことを言うておく。あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがた愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知ようになる。」

（13：31－35）

#### 【ペトロの離反を予告する】（13：36－38）

シモン・ペトロがイエスに言った「主よ、どこへ行かれるのですか。」イエスが答えられた。「わたしの行く所に、あなたは今ついて来ることはできないが、後で着いて来ることになる。」ペトロは言った。「主よ、なぜ付いて行けないのですか。あなたのためなら命を捨てます。」イエスは答えられた。「わたしのために命を捨てるというのか。はっきり言うておく。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう。」

（13：36－38）

イエスがこれからどこかに行かれるときいて、ペトロはどこへ行くのだろう、どうしてついていけないんだろうと言う疑問を持ちます。この時、ペトロの中に、あるいは同じ疑問を抱いた弟子たちのなかにも、それが地上の場所ではないということが分かっていないのです。それで、なぜついていけないのかとイエスに迫り、とうとう「あなたのためなら命を捨てます」とまで宣言します。しかし、イエスは悲しい目をしてこう言われたのです。明日の朝、鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言う。

## イエスは父に至る道

---

【イエスは父に至る道】（14：1－14）

心を騒がせるな。神を信じなさい。わたしの父の家には、住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くか、その道をあなたがたは知っている。（14：1：4）

「心を騒がせるな」という言葉は、裏切り者の予告とペトロの否認の予告と弟子たちの動揺に対しての言葉です。そして、話は天上のことになります。そこには、住む所がたくさんあり、もしなければ、イエスが用意をすと言われています。そして、用意ができたなら、戻って来て、弟子たちをご自分のもとへ迎えると言われました。こうして、また同じ所にわたしたちはいることになるとおっしゃったのです。

トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。」イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、誰も父のもとに行くことができない。あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや既に父を見ている。」

（14：5－7）

ここで、トマスが質問をします。「主よ、どこへ行かれるのですか」トマスはそして、おそらく弟子全員が、ずっとイエスといながら、イエスが天上（神のおられる所）から来たことを分かっているのです。それゆえ、そこへいく道を、どうやって知るのかと聞いているのです。イエスを知り、信じるのが道を教えて真理を示して永遠の命を得ることが父のもとへ行くことなのです。トマスたちはわかったでしょうか。そして、イエスは、わたしを知っているなら父をも知ることになる、いや、あなたがたは既に父を見ているとおっしゃいました。この父とはどんな存在なのか、まだ弟子たちには分らないのです。

フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分っていないのか。わたしを見たものは父を見たのだ。『わたしたちに御父をお示してください』というのか。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行なっておられるのである。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信

じなさい、もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。はっきり言うておく。わたしを信じるものは、わたしが行なう業を行ない、また、もっと大きな業を行なうようになる。わたしが父のもとへ行くからである。わたしの名において願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。わたしたちの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。

(14 : 8 - 14)

13節で「あなたがたが既に父を見ている」とイエスがおっしゃっています。しかし、フィリポは「主よ、わたしたちに御父をお示してください。」つまり、神を見せてほしいと頼んでいます。これは、愚問であります。人間は皆、神を見てみたいと思っているのではないのでしょうか。その素直な気持ちを発したのではないとも言えます。父とは神のことである、イエスは神の子どもであるということを実に分って質問したかは不明です。イエスは、「こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分っていないのか」と驚きの声を上げられます。わたしが言うことを信じられないなら、わたしの業そのものを信じなさい。しかし、弟子たちは、またも、言われることが分らないのです。イエスはおっしゃいました。そして、わたしを信じ、わたしの名において、願うことは何でもかなえてあげよう。と約束されました。この約束ができるのは、イエスが神であることの強力な根拠だと言えます。

【聖霊を与える約束】 (14 : 15 - 31)

「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる。このかたは真理の霊である。世はこの霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたとともにおり、これからも、あなたがたのうちにいるからである。

(14 : 15 - 17)

イエスは、天上に帰ったならば、父（神様）にお願いして、イエスではない別の弁護者を永遠にあなたがたと一緒にいるようにしようとおっしゃいます。「その方は、真理の霊である」これは、聖霊を表します。イエスのように受肉した存在でなく、神の働きをされる存在です。更に、世はこの霊に無関心で、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っているとおっしゃいます。これは、世の人には見えない聖霊によって行なわれる業を認められないということでしょうか。それは、イエスの持つておられる力であり、今までは、イエスはが一般の人にも目に見える御子として働かれましたが、これからは、御霊として弟子たちとずっと一緒におられると言われているのではないのでしょうか。

わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたの所に戻ってくる。しばらく

くすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きてるので、あなたがたも生きることになる。かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分る。わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛するものである。わたしを愛する人はあなたがたにわかる。わたしを愛する人はわたしの父に愛される。、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す。」（14：18－21）

「わたしは、あなたがたを孤児にはしておかない」とイエスはおっしゃいます。戻ってくると言われるのです。これが、復活です。それは、信じた弟子にだけ見えるのです。その再会の日には、「わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分る。」と何度も教えられたことを繰り返されました。イエスの復活にあたって、弟子たちの目がようやくが開けられるということでしょうか。神とイエスが、そしてイエスの弟子たち一人一人に、それぞれがそれぞれの内なる存在としており、互いに愛することが分るようになるのでしょうか。

イスカリオテでない方のユダが、「主よ、わたしたちにはご自分を表そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、なぜでしょうか」と言った。イエスはこう答えて言われた。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人に愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む、わたしを愛さないものは、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。（14：22－24）

イスカリオテでない方のユダがイエスが啓示されているのに、自分たちにだけ知らされているが、もっと広い人々にかたられないのはなぜかと質問しました。イエスは、イエスを愛し、イエスの言葉を守る者のみ、父とイエスは自らを啓示し、とどまるというものだとおっしゃいました。イエスを受け入れるか否かによる分離は、決定的なことなのです。そしてイエスは「あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。」何度も繰り返して言われる教えを語られました。

わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがはなしたことをことごとく思い起こさせてくださる。（14：25－26）

イエスは、わたしの教えたことは、今度は父がわたしの名によって遣わされる聖霊がおしえてくれると言われました。地上の啓示が完全に開示されるために、聖霊が派遣されるのです。

わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを世が与えるよ

うにあたえるのではない。心を騒がせるな、おびえるな。『わたしは去っていくが、また、あなたがたのところに戻ってくる』と言ったのをあなた方は聞いた。」わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ。父はわたしよりも偉大な方だからである。」ことがおきたときに、あなたがたが信じるようにと、今、そのことの起こる前に話しておく。もはや、あなたがたと多くを語るまい。世の支配者がくるからである。だが、彼はわたしをどうすることもできない。わたしが父を愛し、父がお命じになったとおりに言っていることを、世は知るべきである。さあ、立て。ここから出かけよう。」（14：27－31）

\* 14章の決別説教を締めくくる部分です。

イエスは平和について語り、再び戻ってくること、そして、「わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ」と言われます。そして、これから起こること、つまり受難と復活のために、これらのことを話したと言われるのです。やってくるのは、世の支配者、それは具体的にはユダヤ教の指導者たちですが、サタンに見入られた人々です。そして、最後に「さあ、立て。ここから出かけよう」と弟子たちを促されたのです。



## イエスはまことのぶどうの木

---

【イエスはまことのぶどうの木】（１５：１－１７）

\*前章で、「さあ、立て。ここからでかけよう」とあるのに、また説教がつづいているのは奇妙です。これについて、学者の中でも様々な意見があるそうです。たとえば、１５章、１６章（あるいは１７章）のあとに１４章を挿入したという説がありますが、それは、福音書記者自身の手になるのか、後世の誰かがやったのか、もはや確定することは難しいのが現状です。

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父に取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたのうちにいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。（１５：１－１０）

イエスは、自分自身を「まことのぶどうの木」に例えて、話をされます。まことのぶどうの木の父は、農夫である。その働きによって、ぶどうの木は生かされているのです。わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな農夫に取り除かれることになります。しかし、実を結ぶもの、つまりはイエスを信じ、互いに愛し合うものは、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをされるのです。十一人になった弟子たちはみな、イエスの言葉によって清くされています。わたしとつながっていれば、わたしもあなたがたとつながっています。つながっていなければ、枝は外に投げ捨てられ、枯れて、集められ、火に入れて焼かれてしまいます。わたしにつながっていれば、その望み（祈り）を何でも願いなさい、かなえられます。あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となることでわたしの父は栄光をお受けになるのです。すでに与えた掟、（互いに愛し合いなさい）を守って、わたしの愛にとどまっていなさいとイエスは語っておられます。

これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが

満たされるためである。わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命をすてること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行なうならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしは、あなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。（15：1－15）

わたしの掟は、ただ一つ「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」であるとイエスはおっしゃいます。でも、現代のわたしたちは、イエスにお目にかかったこともないし、「イエスが愛したように」とはどういうことなのかわかりません。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」という言葉は、当時の格言から来た言葉のようです。この友というのはもちろん普段からの友も含めますが、それよりも、会ったことのない人にも、愛を持って接する、手助けをする、自分の命を捨てるように、言われているのです。イエスは、弟子たちをもう僕とは呼ばない、友と呼ぶとおっしゃっています。わたしたちもイエスの友になれるのでしょうか。難解な部分が多い聖書の教えを、少しずつ少しずつかじりながらただ一つの掟を守るように努力し、イエスを信頼して生きて行くことが、わたしたちにできることではないかと思います。

イエスは言われます。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのだと。これは何度も繰り返しおっしゃっていることです。遊び友達を選ぶように、その辺にいた人に声かけたわけではないのです。主体はイエスの選びなのです。そして、任命されたあなたがたは、わたしがしたように、伝道をしなさい。わたしの名によって願えば、父はその伝道の実が残るように、何でも与えてくださいます。互いに愛し合いなさい。それがイエスのわたしのただひとつの命令です。

ここからは、決別説教において、迫害を予告をしたことの目的が語られます。それは、「あなたがたをつまずかせないためである」困難で危機的状況においては、イエスがキリストであり、神の啓示者であるという信仰を保ち続けることができないので、つまずき倒れる者が現れてくるのです。しかし地上のイエスに君臨するキリストが、そのことを予告しその意味を明らかにしているということは、弟子たちの励ましとなるのです。それに続いて、人々はあなたがたを会堂から追放するだろうと言われます。イエスの時代、から続く使徒たちの時代を思われ、イエスをキリストと告白したからといって、会堂追放と言う処置は取られることはなかったのです。そういうメシア運動は、ユダヤ教内部に繰り返し登場していたのであり、異端宣告はなされなかったのです。もちろん、ユダヤ教当局による局地的な迫害はあったように思われるのですが、ユダヤ教の公式決定に基づくものではなかったのです。使徒後時代の初期においては、まだキリスト教は、ユダヤ教と未分化の状態になったと思われ、ユダヤ教キリスト派と言った様相を呈していた教会もあったと思われ。この決別説教において、会堂追放が予告されていますが、そのような状況はこの説教を聞いていると設定されているイエスの直弟子たちには妥当しないのです。

【迫害の予告】（15：18－16：4）

世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。（15：18－19）

なぜ、イエス亡き後に迫害がおこるか。世間があなた方を憎むのは、あなた方を憎む前に世がわたしを憎んでいたことを思い出しなさい。あなた方は、もはや世に属していないのです。もし、世に属していれば、迫害を受けることはないでしょうが。すでにイエスによって選び出されたあなた方は、世に属していないとイエスはその覚悟を固めるように話し始められます。

「『僕は主人にまさりはしない』とわたしが言った言葉を思い出しなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなた方をも迫害するだろう。わたしの言葉を守ったのであれば、あなた方の言葉をも守るだろう。しかし人々は、わたしの名の故に、これらのことを皆、あなた方にするようになる。わたしをお遣わしになった方を知らないからである。

（15：20－21）

「僕は主人にまさりはしない」とかつて教えられました。だから、イエスが主人でああなたがたが弟子だと思っている世は、あなた方を迫害するのです。わたしをお遣わしになった方を知らないからです。

わたしが来て彼らに話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが、今は彼らは自分の罪に着いて弁明の余地がない。わたしを憎む者は、わたしの父をも憎んでいる。誰も行なったことのない業を、わたしが彼らの間で行なわなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、その業を見た上で、わたしとわたしの父を憎んでいる。しかし、それは、『人々は理由もなく、わたしを憎んだ』と彼らの律法に書いてある言葉が実現するためである。（15：21－25）

イエスは、御自分が世に来られ、神の業を見せたことを後悔していらっしゃるのでしょうか。けれども、これは全知全能の神様がお決めになったこと。私たちには想像もつかない単位でこの世を見ていらっしゃるのではないのでしょうか。

わたしが父のもとからあなた方に遣わそうとしている弁護者、すなわち父のもとから出る真理の霊が来る時、その方がわたしについて証しをなさるはずである。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。（15：26－27）

ここからは、少し明るい未来の話になります。十字架の後にいらっしゃる真理の霊について話されています。真理の霊が来られる時、弟子たちは、イエスのことを存分に聞き、学び、活動ができるようになるでしょう。迫害されるでしょうから、厳しい試練はいくつもあるでしょうが。

これらのことを話したのは、あなた方をつまずかせないためである。人々はあなたがたを会堂から追放するだろう。しかも、あなた方を殺す者が皆、自分は神に奉仕していると考えるときが来る。彼らがこういうことをするのは、父もわたしをも知らないからである。しかし、これらのことを話したのは、そのときが来た時に、わたしが語ったということをあなた方に思い出させるためである。」

(16:1-4)

【聖霊の働き】（16：4－15）

彼らがこういうことをするのは、父をもわたしをも知らないからである。しかし、これらのことを話したのは、その時が来た時に、わたしが語ったということをおなたがたに思い出させるためである。」

（16：1－4）

ここで、迫害の理由が述べられています。世またユダヤ人が弟子たちの共同体を迫害するのは、父でも子であるキリストをも「知らないからである」イエスは啓示者であり、父に至る唯一の道であった。そのイエスを拒絶することは、神をも拒絶することになるのです。彼らは、神に奉仕すると確信しながら迫害をしているが、その実は、真理を知らず、神を知らないのです。最後にもう一度、迫害を予告することの目的が語られています。「その時が来た時に（まさに、来ている）弟子たちは、イエスがそうした事態を見通しておられたことを思い起こして、励ましを得るためであるのです。

初めからこれらのことを言わなかったのは、わたしがあなたがたと一緒にいたからである。

（16：4）

これから話すことを、それぞれが弟子になった後に、すぐに言わなかったのは、その時はわたしがあなたがたと一緒にいたからですとイエスはおっしゃいました。それは、十字架をもって人の子が上げられること、そして、使徒たちが古いイスラエルの会堂から追放されるばかりか、迫害を受け、遠からず、イエスと同じ道を通らなければいけないことでした。

今、わたしは、わたしをお遣わしになった方のもとに行こうとしているが、あなたがたは誰も、『どこへ行くのか』と尋ねない。むしろ、わたしがこれらのことを話したので、あなたがたの心は悲しみで満たされてい（16：6）

弟子たちは、イエスがどこへ行くか、わかっていました。それは、天上の父のところで、自分たちの手の届かない所でした。それゆえ、改めてイエスの行き先を聞く勇氣は持てないでした。そして、弟子たちの心は、イエスの言葉通り悲しみで満たされてきました。それは、イエスも同じだったに違いありません。

しかし、実を言うと、わたしが去って行くのはあなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたの所に送る。その方がくれば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと、義についてとは、わたしが父

のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること、また、裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである。

(16 : 7 - 11)

悲しみに満たされている弟子たちに、イエスは、「わたしが去って行くのはあなたがたのためになる」とおっしゃいます。これから弟子たちを助ける弁護者が来ることになっているからです。弁護者は世の誤りを明らかにしてくれるのです。イエスを信じない人たちの罪、この世の支配者が断罪される裁き。これらのことを弟子たちに教えてくれるのです。イエスは「去って行くのはあなたがたのためになる」とおっしゃいますが、その裏に、弟子たちと離れる悲しみがにじみ出ているような箇所です。

言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。父が持つておられる者は、すべて、わたしの者である。だから、わたしは『その方がわたしのものを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである。

(16 : 12 - 15)

「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない」

(16 : 12)

「言っておきたいことは、まだたくさんある」イエスのこの言葉の中には、これから、迫害を受けながら歩いていく弟子たち一人一人に声をかけてやりたい、まだ、教えていないことを教えてやりたいと言う気持ちがあふれています。しかし、イエスの十字架を経験するまでは、弟子たちにはすべてを理解することができないようにされているのです。

しかし、その方、すなわち真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからです。その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。父が持つておられるものはすべて、わたしのものである。だから、わたしは『その方がわたしのものをうけて、あなたがたに告げる』と言ったのである」(16 : 13 - 15)

イエスは言われました。真理の霊によって、これまでのことをすべて理解できるようになり、そして、これから起こることもあなたがたに告げるでしょう。その方はわたしに栄光を与えてくれます。あなたがたは、わたしについて、より理解を深めることになるのです。

【悲しみが喜びに変わる】（16：16－24）

しばらくすると、あなたがたはもうわたしをもう見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる。」そこで、弟子たちのある者は互いに言った。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とか『父のもとに行く』とか言うておられるのは、何のことだろう」また、言った「『しばらくすると』と言うておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるか分からない」

（16：16－18）

イエスの言葉を聞いていた弟子たちは、今まで通り、何も分からないままです。これから起こる、イエスの十字架、自分たちに降り掛かる迫害など、まだ分ることができないのです。受難のあとまで、弟子たちには、すべて隠されていたと言ってもいいでしょう。それでも、イエスは語り続けられるのです。

イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とわたしが言ったことについて、論じ合っているのか。はっきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ、あなたがたは悲しむが、その悲しきは喜びに変わる。女は子供を産む時、苦しむものだ。自分のときが来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間がこの世に生まれでた喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。ところで、今はあなたがたも、苦しんでいる。しかし、わたしは再びあなた方と会い、あなたがたは心から喜ぶことになっている。その喜びとあなたがたから奪い去る者はいない。その日には、あなたがたはもはや、わたしになにも尋ねない。はっきり言うておく。あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。いままでは、あなたがたはわたしの名によって何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びに満たされる」

（16：19－24）

悲しみ、苦しみの後に喜びがやって来る。はっきり言うておく。あなたがたはこれから、わたしの名によって願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びに満たされるようになる。」ここに書かれた祈り「イエスの名によって願う」とは今日まで、続く祈りの言葉として、たくさんの人に祈られている。

\*教会や教派によって違いますが、例えば、「我が主イエス・キリストの御名によって祈ります」と祈りの最後に言います。

【イエスは既に勝っている】（16：25－33）

「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたの為に父に願ってあげる、とは言わない。父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたがわたしを愛し、わたしが神のもとから出てきたことを信じたからある。わたしは父のもとから出て、世に来たが、今世を去って、父のもとに行く。」弟子たちは言った。「今は、はっきりお話になり、少しもたとえを用いられません。あなたがなんでもご存知で、誰もお尋ねする必要のないことが、今、分りました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。だが、あなたがたは散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにすると時が来る。いや既に来ている。しかし、わたしは一人ではない。父が、共にいてくださるからだ。これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を知るためである。あなたがたは世に苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。(16:25-33)

イエスは、ずっと、すべてのことについて、たとえを用いて話をしておられました。しかし、たとえが必要ないときが来たと話し始められます。

今までは、弟子たちが願い、イエスに伝えて、神に祈るようと、事が進んでいました。でも、これからは、「イエスの御名によって」と祈ればいいのだとおっしゃいました。すると弟子たちは「あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます」と告白しました。今までの道のりで、それが分っていなかったのか。と弟子たちを叱咤するのは酷なことでしょう。イエスは「今、ようやく、信じるようになったのか」と言われました。イエスの十字架への歩みが、着々と進んでいるのを感じます。「わたしは既に世に勝っている」という言葉は、二千年たっても信者のいるイエスの偉大さをも表しているのではないのでしょうか。



## イエスの祈り

---

### 【イエスの祈り】（１７：１－２６）

\*決別説教の直後に位置する、１７章は、その内容のために、宗教改革時代以来、この箇所は「大祭司の祈り」と呼ばれてきました。それは、今や、地上に去ろうとしているイエスが、大祭司のように、残される弟子たちのために祈っているからです。

イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を表すようになるために、この栄光を与えてください。

（１７：１）

これまでの長い説教を語り終え、天を仰いでお祈りを始められました。「父よ、時が来ました」と祈られるイエス。その「時」とは、他ならぬ、逮捕、裁判、そして十字架を表しています。しかし、その後で復活し、天に戻られることが決まっています。イエスは、父の栄光を表すために、ご自分の受難と復活に栄光を与えてくださいと祈られます。

あなたは子にすべての人を支配する権能を与えてくださいました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができます。永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。わたしは、行なうようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました。父よ、今、御前でわたしに栄光を与えてください。世界が造られる前に、わたしが持っていた栄光を。（１７：２－５）

イエスは、父により与えられた権能によって、ゆだねられた人々に永遠の命を与えることができた報告をされます。その永遠の命とは、父である神と遣わされたイエス・キリストを知ることでした。そして、自らが、天地創造の前から持っていた栄光をあたえてほしいと言われています。

世から選び出してわたしに与えてくださった人々にわたしは御名を現しました。彼らはあなたの者でしたが、あなたはわたしに与えてくださいました。かれらは、御言葉を守りました。わたしに与えてくださったものはみな、あなたからのものであることを、今、彼らは知っています。なぜなら、わたしはあなたから受けた言葉を彼らに伝え、彼はそれを受け入れてわたしがみもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じたからです。彼らのためにお祈りします。世のためでなく、わたしに与えてくださった人々のためにお祈りします。彼らのはあなたの者だからです。わたしのものはすべてあなたのもの、あなたのものはわたしのものです。わたしは彼らによって栄光を受けました。わたしは、もはや世にはいません。

彼らは世に残りますがわたしはみもとに参ります。聖なる父よわたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つになるためです。（17：6－11）

「世から選び出してわたしに与えてくださった人々」とは、使徒たちとラザロなどの協力者のことを指していると思われます。イエスとイエスをお遣わしになった方を信じた人々です。（弟子たちは、先ほど、やっと信じたところですが）そして、イエスはご自分のためでなく、彼らのために祈るのだとおっしゃっています。ご自分は間もなくこの世から姿を消すこと、その後の彼らを守ってくださるようにと祈っていらっしゃいます。それは、ただ安全に生きるということではなく、一つになるためなのです。それから「わたしは彼らによって栄光を受けた」と言われました。

わたしは彼らと一緒にいる間、あなたが与えてくださった御名によって彼らを守りました。わたしが保護したので、滅びの子（イスカリオテのユダ）のほかは、だれも滅びませんでした。聖書が実現するためです、しかし、今、わたしはみもとに参ります。世にいる間に、これらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。わたしはかれらに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないからです。わたしが願うのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないのです。真理によって彼らの聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。わたしを世にお遣わしになったように、わたしを世にお遣わしになったように、彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです。（17：12－19）

イエスは、この世に残して行く人々のことをひきつづき祈られます。「滅びの子」とはイエスを裏切るイスカリオテのユダのことです。彼以外は誰も滅びなかったとイエスは言われています。しかし、神はユダを捨て置かなかったとわたしは信じています。話がそれましたが、イエス一行を敵とした世は、やがてイエスを十字架にかけたあと、もう彼らのそばにすることができない不安に陥ります。神に彼らが御言葉を真理として生涯を送ることができるように、悪い者から守ってくださいと祈っておられます。

また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によって信じる人々のためにも、お願いします。父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。あなたがくださった栄光をわたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。わたしが彼らのうちにおり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして

、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたことを、世が知るようになります。父よ、あなたが与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えてくださったわたしの栄光を、彼らに見せるためです。正しい父よ、世はあなたを知りませんが、わたしはあなたを知っており、この人々とはあなたがわたしを遣わされたことを知っています。また、これから知らせます。わたしに対するあなたの愛が彼らのうちにいるようになるためです。（17：20－26）

イエスは、直接ご自分と会って信じる人々だけでなく、使徒たちが発する言葉で信じるようになる将来の信徒にまで思いをにかけてくださっています。そして、これから、すべての人が一つになり、神の内に、イエスの内に生きて行くことができるようにと願っておられます。父と子と一つになったこの世がイエスの祈りの言葉にその愛がわき上がっています。

## 裏切られ、逮捕される

---

【裏切られ、逮捕される】（１８：１－１１）

こう話し終わると、イエスは弟子たちと一緒に、キドロンの谷の向こうへ出て行かれた。そこには園があり、イエスが弟子たちとその中に入られた。イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスは、弟子たちとともに度々ここに集まっておられたからである。それでユダは、一隊の兵士と、祭司長たちやファリサイ派の人々の遣わした下役たちを引き連れて、そこにやって来た。たいまつやともし火や武器を手にしていた。イエスのご自分の身に起こることを何もかも知っておられ、進み出て、「誰を捜しているのか」と言われた。彼らが「ナザレのイエスだ」と答えると、イエスは「わたしである」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒にいた。イエスが「わたしである」と言われたとき、彼らは後ずさりして、地に倒れた。

（１８：１－６）

弟子たちへの説教を終えると、イエスは弟子たちと、エルサレムの東門を出て坂を下り、キドロンの谷の向こうの園へ行かれました。ここは、弟子たちとよく集まっておられた場所で、イエスを裏切ろうとしているユダも、この場所を知っていました。イエスは、すでに逮捕されることを知っておられたので、隠れることなくこの場所を選ばれたのでしょう。ユダは、ここへ、兵士や祭司長たち、ファリサイ派の下役を引き連れてやって来ました。そこで、イエスは自ら進み出て「誰を捜しているのか」と言われました。この時代は、写真がある訳でもなく、イエスの顔かたちを知らない者がいても、不思議ではありませんでした。そこで、ほかの福音書には、この時合図のために、ユダがイエスに接吻をしたという記述がありますが、ここではイエス自身が「誰を捜しているのか」と言われたのです。イエスがこの受難を受け入れる覚悟をしっかりと決められていることが伝わってきます。兵たちは捜しているのは「ナザレのイエスだ」と答えました。するとイエスが「わたしである」と答えられました。その時、その凜としたお姿に、彼らは後ずさりをして、地面に倒れたのでした。

そこで、イエスが「誰を捜しているのか」と重ねてお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエスだ」と言った。すると、イエスは言われた「『わたしである』と言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人々は去らせなさい。」それは、「あなたが与えてくださった人をわたしは一人も失いませんでした」と言われたイエスのことが実現するためであった。シモン・ペトロは剣を持っていたので、それを抜いて大祭司の手下に打ってかかり、その右耳を切り落とした。手下の名はマルコスであった。イエスはペトロに言われた「剣をさやに納めなさい。父がお与えになった杯は飲むべきではないか。」

（１８：７－１１）

逮捕に来た人々が地面に倒れたので、「ナザレのイエスだ」ともう一度答えたイエスは、「わた

しを捜しているのなら、この人々は去らせなさい」と言って、弟子たちが巻き込まれないように、言われました。ここにある聖句「あなたが与えてくださった人をわたしは一人も失いませんでした」というのは、6章39節の言葉です。直接この場面に関係のある言葉ではありませんが、イエスが弟子たちを守られる心のこもった御言葉だと思います。ただ一人、剣を持っていたシモン・ペトロは、マルコスと言う大祭司の手下の右耳を切り落としてしまいます。イエスは、父の決められたことにわたしはしたがうからと、ペトロをいさめられました。

【イエス、大祭司のもとに連行される】（18：12－14）

そこで一隊の兵士と千人隊長およびユダヤ人の下役たちは、イエスを捕らえて縛り、まず、アンナスのところへ連れて行った。彼がその年の大祭司カイアフアのしゅうとだったからである。一人の人間が民の変わりに死ぬ方が好都合だと、ユダヤ人たちに助言したのは、このカイアフアであった。（18：12－14）

自ら逮捕されたイエスを連れて、千人隊長率いる兵士たちとユダヤ人の下役たちは、イエスを縛って、まず、アンナスの所へ連れて行きました。ユダについての記述はありません。いつの間にかいなくなって身を潜めていたのだろうと考えられます。彼らは、この年の大祭司であるカイアフアのところへ連れて行く前に、カイアフアのしゅうとであるアンナスのところへ連れていたのです。アンナスはそれだけ権力を握っていたのです。

【ペトロ、イエスを知らないと言う】（18：15－18）

シモン・ペトロともう一人の弟子は、イエスに従った。この弟子は大祭司の知り合いだったので、イエスと一緒に大祭司の屋敷の庭に入ったが、ペトロは門の外に立っていた。大祭司が知り合いである、そのもう一人の弟子は、出て来て門番の女に話し、ペトロを中入れた。門番の女中はペトロに言った。「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」ペトロは「違う」と言った。僕や下役たちは、寒かったので炭火をおこし、そこに立って火に当たっていた。ペトロも彼らと一緒に立って、火に当たっていた。

ペトロは大祭司の知り合いの弟子と屋敷の庭に行き様子を見ていました。しかし、門番の女中にイエスの弟子だと言われ「違うと」答えてしまいました。13：38の「鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないというだろう」と言う予告が現実となろうとしていました。

【大祭司、イエスを尋問する】（18：19－24）

大祭司はイエスに弟子のことや教えのことについて尋ねた。イエスは答えられた「わたしはいつも、ユダヤ人が皆集まる会堂や神殿の境内で教えた。ひそかに話したことは何もない。なぜ、わたしを尋問するのか。わたしが何を話したかは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。その人々

がわたしの話したことを知っている。」イエスはこう言われると、そばにいた下役の一人が、「大祭司に向かって、そんな返事の仕方があるか」と言って、イエスを平手で打った。イエスは答えられた。「何か悪いことをわたしが言ったのなら、その悪い所を証明しなさい。正しいことを言ったのなら、なぜわたしを打つのか。」アンナスは、イエスを縛ったまま、大祭司カイアファのもとに送った。

(18:19-24)

ここで「大祭司」と書かれているのは、アンナスを指していると思われます。「その年の大祭司」ならばカイアファなのですが、最後の行に「アンナスは、イエスを縛ったまま、大祭司カイアファのもとに送った」とあるので、諸説ありますが、アンナスを指すとして話を進めて行きたいと思います。

イエスは、アンナスに様々なことを聞かれますが、自分はいつも人々の前で語って来た。ひそかに語ったことはない。聞いた人に尋ねるがよいと堂々と答えます。それを聞いた下役が腹を立ててイエスを平手打ちにしますが、イエスは動じません。わたしが悪いことを言ったなら証明しなさいと相手に言ったのでした。そして、アンナスでは手に負えないので、イエスは縛られたまま、大祭司が集まるカイアファのもとに送られていきました。

【ペトロ、重ねてイエスを知らないと言う】

(18:24-27)

シモン・ペトロは立って火に当たっていた。人々が「お前もあのおとこの弟子の一人ではないか」と言うと、ペトロは打ち消して、「違う」と言った。大祭司の僕の一人で、ペトロに片方の耳を切り落とされた人の身内の者が言った。「園であの男と一緒にいるのを、わたしにみられたではないか。」ペトロは、再び打ち消した。するとすぐ、鶏が鳴いた。(18:24-27)

イエスを知らないと言ったペトロについて、また書かれています。イエスの予告通りです。二人にそれぞれイエスの弟子だったと指摘され「違う」と答えてしまうのです。イエスの予告通り、三度の否認のあと、鶏が鳴いたのでした。イエスが、このことを予告されていたこと。それでも最後までペトロをそばにいさせてくださったこと。何もできない自分。ペトロの苦しみを表す言葉が見つかりません。しかし、そのような心の弱い者でも、イエスは愛してくださいます。

【ピラトから尋問される】(18:28-38)

人々はイエスをカイアファの所からピラトの総督官邸に連れて行った。明け方であったしかし、彼らは自分では官邸に入らなかった。汚れないで過越の食事をするためである。そこで、ピラトが彼らのところへ出て来て、「どういう罪でこの男を訴えるのか」と言った。彼らは答えて、「この男が悪いことをしていなかったら、あなたに引き渡しはしなかったでしょう」と言

った。ピラトが「あなたたちが引き取って、自分の律法に従って裁け」と言うと、ユダヤ人たちは「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」と言った。それは、ご自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、イエスが言われた言葉が実現されるためであった。（18：28－32）

夜を徹してのカイアファの裁判をおえて、人々は、イエスを総督官邸に連れて行きました。ここにいるのは、ローマからの総督ピラトです。普段は駐屯地のカイサリアにいますが、ユダヤ人の祭りのときは、治安維持のために、エルサレムに滞在していたのです。ピラトは当然ローマ人ですから、ユダヤ人にとって異邦人になります。ユダヤ教では異邦人は汚れているので、この後始まる過越祭の食事を無事にすませるために、彼らは、異邦人の官邸内に入るのを嫌いました。それで、しかたなくピラトのほうから、彼らの所へ行かなければなりませんでした。

そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、（官邸内の牢にいた）イエスを呼び出して、「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。イエスはお答えになった「あなたは自分の考えで、そういうのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそういったのですか。」ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。一体何をしたのか。」イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世に属していない。」そこでピラトが「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」ピラトは言った「真理とは何か」（18：33－37）

官邸前でしつこくイエスの死刑を叫ぶユダヤ人たちを置いて、ピラトはもう一度官邸の中に入り、イエスを呼び出して尋問しました。しかし、それはちぐはぐな尋問でした。イエスは「わたしの国は、この世には属していない」と言われたのです。あくまでこの世のことしか頭のなかになかったピラトにとって、何を言っているのか分かりませんでした。しかし、言葉尻を捕らえて「それでは、やはり王なのか」と言うと、次にイエスが言われた「真理」という言葉を聞き、「真理とは何か」と捨てゼリフを吐いて、ユダヤ人たちの所へ行くしかありませんでした。

## 死刑の判決を受ける

---

【死刑の判決を受ける】（18：38－19：16）

ピラトは、こう言ってからもう一度、ユダヤ人たちに前に出て来て行った。「わたしはあの男に何の罪も見いだせない。ところで、過越祭には誰か一人をあなたたちに釈放するのが慣例になっている。あのユダヤ人の王を釈放してほしいか。」すると彼らは、「その男ではない。バラバを」と大声で言い返した。バラバは強盗であった。

（18：37－40）

ピラトは、冷静に見て、イエスが有罪であるとは思えませんでした。そこで有罪の判決をユダヤ人たちに宣言します。そうしておいて、過越祭に一人だけ恩赦をしている慣例を持ち出し、イエスを釈放しようとしています。ですが、「あのユダヤ人の王を釈放してほしいか」と聞くと、ユダヤ人たちは、強盗のバラバを釈放しろと叫び出します。バラバは、強盗と言っても反ローマ運動を展開した人物で、イエスを釈放するより、危険な人物でした。少なくともピラトには、そう思えたのでした。

そこで、ピラトはイエスを捕らえ、鞭で打たせた。兵士たちは茨の冠を編んでイエスの頭に載せ、紫の服をまとわせ、そばにやって来ては「ユダヤ人の王、万歳」と言って、平手で打った。ピラトはまた出て来て、言った。「見よ、あの男をあなたたちの所へ引き出そう。そうすれば、わたしが彼に何の罪も見いだせないわけが分るだろう。イエスは茨の冠をかぶり、紫の服を着けて出て来られた。ピラトは、「見よ、この男だ」と言った。祭司長たちや下役は、イエスを見ると、「十字架につけろ、十字架につけと叫んだ。ピラトは言った。「あなたたちが引き取って、十字架につけるがよい。わたしはこの男に罪を見いだせない。ユダヤ人たちは答えた「わたしたちには律法があります。律法によれば、この男は死罪に当たります。神の子と自称したからです。」

（19：1－7）

ユダヤ人たちは、強盗のバラバよりも、イエスが十字架につけられることを望みました。あっという間に群衆は気持ちを変えるのです。そこで、ピラトはイエスを捕らえ、鞭で打たせました。兵士たちは茨の冠に紫の衣を纏わせ、イエスを愚弄しました。その後、ピラトは、その惨めな姿のイエスをユダヤ人たちに見せました。ピラトには、イエスのどこに罪があるのか全く分りませんでした。イエスを見るとユダヤ人たちは「十字架につけろ」と叫んでいます。ピラトは、ユダヤ人たちにイエスを引渡すから十字架につけろと言いました。一人の男が「あの男は神と自称したのです、律法では死罪です」と言いました。（本来、ユダヤ人には死刑の執行権はないのですが、イエスは、ユダヤ人に引渡されました）

ピラトは、この言葉を聞いて増々恐れ、再び総督官邸の中に入って、「お前はどこから来た



のか」とイエスに

言った。しかし、イエスは答えようとされなかった。そこで、ピラトは言った。「わたしに答えないのか。お前を釈放する権限も、十字架に着ける権限も、このわたしにあることを知らないのか。」イエスは答えて言われた。「神から与えられていなければ、わたしに対して何の権限もないはずだ。だから、わたしをあなたに引渡した者の罪はもっと重い。」そこで、ピラトはイエスを釈放しようと努めた。しかし、ユダヤ人たちは叫んだ。「もし、この男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない。王と自称する者は皆、皇帝に背いています。」（19：8－12）

ピラトは、イエスが神を自称したとの言葉を聞いて、とにかく釈放してユダヤ人に渡さなければ、何が起こるか分らないと暴動を恐れました。そこで、なんとか釈放しようとするのですが、イエスが言っていることは、政治のことしか頭のないピラトには理解できなかったのです。ユダヤ人たちは、この男を釈放するのなら、あなたは皇帝の友ではない。王と自称する男は、皇帝に背いています。」と叫び始めました。ピラトはさらに追いつめられて行くのでした。

ピラトはこれらの言葉を聞くと、イエスを外に連れ出し、ヘブライ語でガバタ、すなわち「敷石」というという場所で、裁判の席に着かせた。それは過越祭の準備の日の、正午ごろであった。ピラトがユダヤ人たちに「見よ、あなたたちの王だ」と言うと彼らは叫んだ「殺せ。殺せ。十字架に着ける。」ピラトが、「あなたたちの王をわたしが十字架に着けるのか」と言うと、祭司長たちは、「わたしたちには皇帝のほかには王はありません」と答えた。そこで、ピラトは、十字架につけるために、イエスを彼らに引渡した。（19：13－16）

ピラトは、よく考えて処理しないと自分の身も危ないと感じ、公式の裁判の席へイエスを連れ出すことになりました。ユダヤ人たちはあくまで有罪であることを望み、イエスをただ引渡すのでは満足しませんでした。そして、「わたしの皇帝のほかには王はありません」と言って、王を自称している限り、有罪だと主張しました。ピラトは、最後までわからぬまま、十字架に着けるために、イエスを彼らに引渡したのです。

【十字架につけられる】(19:16-27)

こうして、彼らはイエスを引き取った。イエスは自ら十字架を背負い、いわゆる「されこうべの場所」すなわちヘブライ語でゴルゴタと言う所へ向かわれた。そこで彼らはイエスを十字架につけた。ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上に架けた。それには、「ナザレのイエス。ユダヤ人の王」と書いてあった。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がその罪状書きを読んだ。それは、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、「『ユダヤ人の王』と書かず『この男は「ユダヤ人の王」と自称した』と書いてください」と言った。しかし、ピラトは「わたしが書いたものは、書いたままにしておけ」と答えた。

(19 : 16 - 22)

イエスは自らがかかる十字架を背負って、ゴルゴダの丘へ向かわれました。人間を一人張り付けにできる十字架だと考えれば、間近でみたことのないわたしたちにも、相当重い物だったのだろうと想像はつきます。さて、ピラトが書いた罪状書きをめぐって、祭司長たちと一悶着ありました。それは、何もかもユダヤ人の言うことをきくことになったことへの、ピラトの最後の自尊心であったのでしょうか。

兵士たちは、イエスを十字架につけてから、その服を取り、四つに分け、各自に一つずつ渡るようにした。下着も取って見たが、それには縫い目がなく、上から下まで一枚織りであった。「そこで、『これは裂けないで、誰の者になるか、くじ引きで決めよう』」と話し合った。それは

「彼らはわたしの服を分け合い、  
わたしの衣服のことでくじを引いた」

と言う聖書の言葉が実現するためであった。兵士たちはこのとおりにしたのである。(19 : 23 - 24)

十字架に関わる兵士たちが罪人の服をくじ引きで取り合うというのは、このころの習慣であったようです。引用してある文章は、旧約聖書の詩編22 : 19)です。ここで、旧約聖書のとおり物事が運んで行く場面があるというのは、この死刑があくまで神の意志の遂行であるということだと言えます。

イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、ロノパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、ご覧なさい。あなたの子です」と言われた。それから弟子に言われた。「見なさい。わたしの母です。」その時から、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。  
(19 : 25 : 27)

十字架のそばに、女性たちがついていたことが書かれています。そして、そのそばには、「愛する弟子」がいたとあります。男の弟子たちは、皆、どこかに隠れて、イエスが一体どうなってしまうのかと、逃げてしまったことへの後悔に苛まれていたことなのでしょう。しかし、姿を現せば、自分も捕まってしまうのです。

ここに出てくる「愛する弟子」は、十字架のそばにいても、捕まることなく大丈夫だったのが不思議です。しかも、イエスからイエスの母のことを頼まれ、自分の家に引き取ったと書いてあります。「愛する弟子」は、イエスについてはいなかったのでしょうか。十二使徒との関係も不明です。

## 【イエスの死】（19：28－30）

この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。そこには、酸いぶどう酒を満たした器がおいてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソプに付け、イエスの口もとに差し出した。イエスは、このぶどう酒を受け取ると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。

（19：28－30）

成し遂げられたこととは何でしょうか。イエスの十字架の死を、イエスが神から与えられたできごとの頂点とみて、そこに、イエスの業と栄光の完成を見るのです。ここには、イエスの人間的苦痛はほとんど書かれていません。

実は、わたしは、十字架の死を栄光と受け取ることができないでいます。なぜ、悲惨な十字架刑での死が栄光なのか。そうなることがわかっていたとしても、承知することができません。栄光は復活の後、天に上がられるときだと思えてならないのです。書かれていなくても、イエスは人間の体でいらっしゃるのだから、言葉にならない苦しみを味あわれたと思うのです。

イエスの「渴く」ということばに、見張りをしていた兵士たちが、ヒソプにつけた海綿に浸した酸いぶどう酒を渡します。ヒソプとは、ヒソプ草の茎を束ねたもので、ユダヤ人が清めの儀式に使ったものです。イエスはぶどう酒を受けると「成し遂げられた」と言って、息を引き取られました。このあたりは、映画のように場面が浮かんでくるみたいです。イエスのご自身で「成し遂げられた」と言われたのだから、苦しみよりも、すべてが終わる安堵の方が強かったのかもしれない。すべてを引き受けて終えること、それが栄光ということなのではないでしょうか。

## 【イエスのわき腹を槍で突く】

（19：31－37）

その日は準備の日で、翌日は特別の安息日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に遺体を十字架の上に残しておかないために、足を折ってとりおろすように、ピラトに願い出た。そこで、兵士たちが来て、イエスと一緒に十字架につけられた最初の男と、もう一人の男との足を折った。イエスのところに来てみると、すでに死んでおられたので、その足は折らなかった。しかし、兵士の一人が槍でイエスのわき腹を指した。すると、すぐ血と水とが流れ出た。それを目撃した者が証ししており、その証は真実である。そのものは、あなたがたにも信じさせるために、真実を語っていることを知っている。これらのことが起こったのは、「その骨は一つもくだされない」（旧約聖書 出エジプト記12章46節）という聖書の言葉が実現するためであった。また、聖書の別のところに、「彼らは、自分たちの突き刺した者を見る」とも書いてある。

（19：31－37）

## 【墓に葬られる】（19：38－42）

その後、イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちを恐れて、その事を隠していたアリマタヤのヨセフが、イエスの遺体を取り降ろしたいとピラトに願い出た。ピラトが許したので、ヨセフは行って遺体を取り降ろした。そこへ、かつてある夜、イエスのもとにきたことのあるニコデモも、没薬と沈香をまぜたものを百リトラばかりもってきた。彼らはイエスの遺体を受け取りユダヤ人の埋葬の習慣にしたがい、香料を添えて亜麻布で包んだ。イエスが十字架につけられたところには園があり、そこには、だれもまだ葬られたことのない新しい墓があった。その日はユダヤ人の準備の日であり、この墓が近かったので、そこにイエスを納めた。

### \* 「没薬と沈香」

イエスを葬るにあたって、二人の人物が書かれています。二人ともユダヤ指導者で議員である、アリマタヤのヨセフとニコデモです。二人とも指導者たちの陣営にしながら、イエスを信じていた隠れ信者ということになります。

しかし、今は隠れることをせず、アリマタヤのヨセフは、ピラトにイエスの遺体を取り降ろしたいと願い出て、許可されました。また、ニコデモは、没薬と沈香を百リトラ（約32・6キログラム）も持ってきて、二人でユダヤ人の習慣に従って、亜麻布と香料でイエスを葬る準備をしました。それから、近くにあった、まだ誰も葬られたことのない墓にイエスを納めたのです。男の弟子はみんな隠れているし、女性の弟子がピラトにイエスを引き取りを願い出ても、運ぶ人がいません。この二人が動いてくれたことで、イエスは、無事に埋葬されることができたのです。

## 復活する

---

【復活する】（２０：１－１０）

週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」そこで、ペトロともう一人の弟子は、外に出て墓へ言った。二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより早くは走って、先に墓に着いた。身を屈めて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。続いて、シモン・ピトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。イエスは必ず死者の中から復活されることになっていると言う聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかった。（２０：１－１０）

安息日が終わった翌日の朝早く、マグダラのマリアはイエスの墓へ行きました。墓の入り口は石で塞いでおくのが慣習ですが、マリアが見たときは、もう、石は取りのけてありました。そこで、彼女は、空っぽの墓を見ました。この時、そして、急いで、シモン・ペトロと「イエスが愛しておられたもう一人の弟子」のところへ走って告げに行きました。この報告をする時、マリアは「わたしたちにはわかりません」と言っている所ので、女性たち複数で墓に言ったことが分ります。それぞれに告げに行くのも、何人かで走って行ったのでしょう。弟子たちと「イエスが愛しておられた者一人の弟子」は、墓へ走って行きました。すると、確かに遺体はなく、体を覆っていたはずの亜麻布が置いてあるのが分りました。頭を包んでいた覆いは、少し離れていた所に丸めてあったということは、手足が自由になったイエス御自身がおはずしになったのかもしれない。

彼らは、まだ、復活ということを理解していませんでした。彼らにとっては、ただの墓泥棒でした。それから、弟子たちは家に帰って行きました。イエスの遺体に関しても、取り去られたとか、どこへ置かれているのかと、話していて、復活されて遺体のままでないことは念頭にないのです。

【イエス、マグダラのマリアに現れる】（２０：１１－１８）

マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身を屈めて墓の中を見ると、イエスの置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた天使たちが「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」こう言いながら後ろを振

り向くとイエスの立っているのが見えた。しかし、それがイエスだとは分らなかった。イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。誰を捜しているのか。」マリアは門弟だと思って言った。

「あなたがあのかたを運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしがあの方を引き取ります。イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちの所へ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方の所へわたしは上る』と。マグダラのマリアは弟子たちの所へ行って「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われていたことを伝えた。

(20:11-18)

イエスは、マリアに姿を現されました。墓の外で泣いていたマリアに天使が見え、続いて、イエスが姿を現されたのです。でも、イエスはすがりついては行けませんとおっしゃいます。これは、どう意味なのでしょう。彼女の願い（イエスとまた共にいられること）がかなえられたら十字架と復活の究極の目的が水泡に帰すためだという意見があります。これは、すがりつくという行為によって、イエスの力が出て行ってマリアの願いを叶えてしまうということでしょうか。すがりつくということで、彼女がイエスを自分の手の中に握りしめてしまうからとも言われています。イエス御自身は「まだ父のもとへ上っていないのだから」と言われます。でも、イエスは父のもとへ帰るともう、真理の霊が下って弟子たちを助ける、イエス自身は帰って来ないとおっしゃっていたのです。

【イエス、弟子たちに現れる】(20:19-23)

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちがいる家の戸の鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹をとをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そうってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。誰の罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。誰の罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。

(20:19-23)

その日の夕方、鍵をかけた所で集まっていた弟子たちの真ん中に、イエスが現れました。「あなたがたに平和があるように」とイエスは言われました。そして手（十字架に釘打たれたときの傷）とわき腹（死んでいるかどうか兵士にわき腹をさされたときの傷）をお見せになったのです。弟子たちは、主を見て喜びました。その弟子たちにイエスは、「父がわたしをお遣わせになった

ように、わたしもあなたがたを遣わす。」と宣教へ遣わせるとおっしゃいました。そして、彼らに息を吹きかけられたのです。これは、聖霊を彼らに息を吹きかけられたのです。聖霊とは神様のお力のことです。息とか風といった言葉で表されることもあります。そして、イエスは弟子たちに、罪を赦す権限を与えられたのです。

#### 【イエスとトマス】（20：24－29）

十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られた時、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。地にはみな鍵が架けてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばして、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は幸いである」（20：24－29）

十二弟子の中の一人、ディディモと呼ばれるトマスは、イエスが弟子たちの所に現れた時に一緒にいませんでした。ほかの弟子たちから「主を見た」と言われて、自分はその傷を確かめ、触ってみなければ信じられないと言っていました。

最初に現れた日曜日から一週間後の日曜日、イエスはトマスのために、もう一度現れてくださいました。そして、トマスに自分の傷跡を触るように言われました。しかし、トマスは姿を見ただけで「わたしに主、わたしの神よ」と信じました。そんなトマスに、イエスは言われました。「わたしを見たから信じたのか。見ないで信じる人は幸いである」

このイエスの言葉は、トマス一人にあてたものではありません。イエスがこの世にいなくなられた今、イエスを見ないで信じることは私たちにはできなくなったのです。弟子たちや同時代人たちは、イエスの人柄に直接接触して信者となって行ったのですが、今はそれはできません。しかし、それは、弟子の一人でさえ疑いを持つようなことです。決して容易なことではないのです。イエスを見ないで信じる時代に入って、もう二千年が経っていることに、驚きと感動を覚えずにはられません。

#### 【本書の目的】（20：30－31）

このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物にかかれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信

じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。（20：30－31）

イエスのしるし（奇蹟）と言われる話は、ほかの福音書にあるものだけでなく、各地で、たくさん語り継がれていたようです。しかし、このヨハネ伝では、それらのしるしは書かれていません。このヨハネ伝が書かれたのは、イエスを見ずに、イエスを神の子メシアであると告白するためなのです。それは、イエスの名によって罪を赦され（贖罪）ることを受け入れ、永遠の命をいただくことです。この聖書が書かれてから今日まで、このことは受け継がれて行くのです。



## イエス、七人の弟子に現れる

---

【イエス、七人の弟子に現れる】（21：1－14）

その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子がいた。シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「私たちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜はなにもとれなかった。すでに世が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。」だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。イエスが「子らよ、何か食べるものがあるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。イエスの愛しておられた弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻ってきた。陸から二百ペキス（約90メートル）ばかりしか離れていなかったのである。さて、陸に上がってみると、炭火が起こしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。

イエスが「今とった魚を何匹かもってきなさい」と言われた。シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。イエスは、「さあ、きて、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いだそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。イエスが死者から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。

イエスは、今度はティベリアス湖畔で弟子たちに姿を現されます。漁に出ているときです。岸にるのが「主だ」と聞いたとたんに、ペトロが湖に飛び込んで、イエスの近くにいくところで、いかにイエスを愛していたか感じるができるでしょう。イエスは普段の格好とは違うお姿だったのででしょう。しかし誰も「あなたはどなたですか」と聞かなかつたと記されています。弟子たちには、イエスであることが、すぐに分ったからです。

ここで、イエスは、いままで魚が取れなかったのが、一転して大量になるというしるしをされています。そして、朝食の準備がされていました。イエスは、パンを取って、それぞれに与え、魚も同じようにされました。ここには聖餐式（現代も教会で行われる、イエスの血と肉にみたてたブドウ酒とパンを食べる儀式）の原型が有ります。これを読むと、聖餐式がイエスから与えられた儀式なのだと強く思えてきます。

【イエスとペトロ】（21：15－19）

食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに「ヨハネの子シモン、この人たち以上に私を愛して

いるか」と言われた。ペトロが「はい、主よ、私が愛していることは、あなたをごぞんじです。」と言うと、イエスは、「私の子羊を飼いなさい」と言われた。二度目めにイエスはいわれた。「ヨハネの子シモン、私を愛しているか。」ペトロが「はい、主よ、私があなただを愛していることは、あなたをごぞんじです。」と言うと、イエスは「私の羊を世話しなさい」と言われた。三度目にイエスは言われた「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」ペトロはイエスが三度目も「私を愛しているか」と言われたので、かなしくなった。そして言った。「主よ、あなたはなにもかもごぞんじです。私があなただを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「私の羊を飼いなさい。はっきり言うておく。あなたは若いときには、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年を取ると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへつれて行かれる。」ペトロがどのような死に方神の栄光をあらわすようになるかをしめそうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「私に従いなさい」と言われた。

(21:15-19)

食事が終わったあと、シモン・ペトロに「ヨハネの子シモン、この人たち以上に私を愛しているか」と聞かれます。ペトロは「はい、主よ、私があなただを愛していることは、あなたをごぞんじです」と答えると「私の子羊を飼いなさい」と言われます。ペトロは、イエスが逮捕された日に、三度イエスを知らないと行ってしまった過去があります。イエスは、前もってそのことを予告されました。そんなことはしないと思っていたペトロは、どんなに自分を責めたでしょう。そんな自分に「私の子羊を飼いなさい」と今後の教会の中心人物として働くように、イエスは言われたのです。イエスはペトロを信頼しておられたのです。

ところが、すぐにまた、イエスが同じ質問をしてこられたのです。もちろん、真実からペトロは答えました。それから、三度目の質問が有りました。ペトロは悲しくなりました。三度の否認をした自分を信じきれないのだろうかと思いつつ、同じように答えました。

それから、イエスはペトロのこれからについて、殉教の予告をされたのです。そして「私に従いなさい」とおっしゃいました。イエスはペトロを信頼しておられたのです。

それは、一緒に旅をし、宣教してきた私のように行きなさいと言う、イエスからの最後のはげましであり、また、ペトロの殉教を告げられたのです。

【イエスとその愛する弟子】

(21:20-23)

ペトロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子がついてくるのが見えた。この弟子は、あの夕食のとき、イエスの胸元によりかかったまま、「主よ、裏切るのは誰ですか」と言った人である。ペトロは彼を見て、「主よ、この人はどうなるのでしょうか」と言った。イエスは言われた。「私の来るときまで彼が活着していることを、私が望んだとしても、あなたになんの関係があるか。」あなたは、私に従いなさい。」それで、この弟子は死なないという噂が兄弟たちの

間に広まった。しかし、イエスは、彼は死なないと言われたのではない。ただ、「わたしのくる  
ときまで彼が生きていることを私が望んだとしても、あなたになにの関係があるか」と言われた  
のである。

(21 : 20 - 23)

この「イエスの愛しておられた弟子」と、ヨハネ伝のなかにのみ出て来る不思議な存在です。十  
二使徒の中には入らない存在のようです。ペトロが、イエスがなくなった後のことを心配し  
ても、イエスはあなたには関係ないと言われてしまいます。この弟子については謎のままなの  
です。

【結び】 (21 : 24 - 25)

これらのことについて証しをし、それを書いたのは、この弟子である。私たちは、彼の証  
しが真実であることを知っている。

イエスのなされたことは、このほかにも、まだたくさんあ  
る。世界もその書かれた書物を納めきれないであろう。

(21 : 24 - 25)

## おわりに

---

おわりに。

正直、おもしろおかしく笑いながら読む本ではないので、おもしろかったですか？と聞くのは愚問を呈しているといえますが、少しでも、聖書に親しみを持っていただけたでしょうか。最後まで読んでいただいて、ありがとうございました。

## テキスト

「聖書 新共同訳」 日本聖書教会刊

## 参考文献

「新共同訳 新約聖書注解 1 日本基督教団出版局

「新聖書注解 1 いのちのことば社

バークレエ ヨハネ福音書上下巻 ヨルダン社

遠藤周作「死海のほとり」 新潮社

遠藤周作「イエスの生涯」「キリストの誕生」 新潮社版